

中 津 市

ひと つ まつ じょう あと  
一 ツ 松 城 跡

—都市計画道路外馬場錆矢堂線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—

2 0 2 5

大分県立埋蔵文化財センター

中 津 市 所 在

# 一 ツ 松 城 跡

—都市計画道路外馬場錆矢堂線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—

2 0 2 5

大分県立埋蔵文化財センター



# 序 文

本書は、都市計画道路外馬場錆矢堂線街路改良事業に伴い、大分県教育委員会が、大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した、一ツ松城跡の発掘調査報告書です。

一ツ松城跡は、中津市中心市街地東方の沖積平野に所在します。中世城館として周知されていますが、資料は乏しくその様相は不明でありました。

発掘調査を実施した箇所には、「楠本」、「屋敷」の小字名が残ります。そのうち「屋敷」において、19世紀代を中心とする井戸、土坑等の遺構を確認しました。これらの遺構からは多種多様な陶磁器・土器のほか、人々が食して捨てた貝類が出土しています。今回の調査では城館に関連する遺構は確認できませんでしたが、瓦質土器風炉等15～16世紀代の土器の出土から、室町・戦国時代頃に平地城館的に形成された村落が近世の一ツ松集落に継承されたものとみられます。

本書が、埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

令和7年3月

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 後 藤 晃 一



# 例 言

- 1 本書は、令和5年度に実施された大分県中津市大字一ツ松所在の一ツ松城跡発掘調査の報告である。
- 2 発掘調査は、都市計画道路外馬場鍔矢堂線街路改良事業に伴い、大分県土木建築部中津土木事務所の依頼により受けて大分県立埋蔵文化財センター（以下、センターという。）が実施したものである。
- 3 発掘調査については、発掘作業及び記録作成、現場管理等の支援業務を、株式会社九州文化財総合研究所に委託した。
- 4 出土遺物の整理作業、実測・トレース・写真撮影は、株式会社九州文化財総合研究所に委託した。
- 5 出土遺物及び調査記録は、センターで保管している。
- 6 本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。
- 7 本書で使⽤した地形図（1/25,000）は国土地理院作成のものを利⽤した。
- 8 本書で使用する遺構略記号は下記のとおりである。  
SP（ピット）、SK（土坑）、SD（溝）、SE（井戸）
- 9 調査区の土層等の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳（1997年度版）』を参照した。
- 10 本書巻末の資料図版一は、中津市歴史博物館の協力を得、同館『特別展 開発！ Kaihotsu！ー中津の古代から中世ー』図録（2024年刊行）掲載図版を引用し、一部、加筆を行っている。
- 11 検出した遺構、出土遺物などの所見については、吉田寛氏（センター調査第二課専門員）に全面的なご指導を得た。  
一ツ松城跡周辺の歴史的環境については、飯沼賢司氏（別府大学名誉教授）、小柳和宏氏・浦井直幸氏・衛藤美紀氏（中津市教育委員会）のご教示を得た。近世陶磁器については、赤松和佳氏（伊丹市役所）、山本文子氏（佐賀県庁）のご教示を得た。出土した貝類については、内海訓広氏（大分県水産研究部北部水産グループ）に同定して頂いた。
- 12 本書の図版作成にあたっては、東晃平氏（センター非常勤職員）のご協力を得た。
- 13 本書の執筆及び編集は、センター企画普及課山本哲也が担当した。

# 目 次

序 文

例 言

第1章	調査の経過と概要	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	発掘作業の経過	1
第3節	整理作業の経過	1
第4節	調査組織の構成	2
第2章	遺跡の位置と環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	3
第3章	調査の方法と成果	5
第1節	調査の概要	5
第2節	区域1の調査	7
第3節	区域2の調査	8
第4節	区域3の調査	9
第5節	区域4の調査	13
第4章	まとめ	22
第1節	遺構と出土した陶磁器・土器について	22
第2節	一ツ松城跡の立地・景観、性格について	23

報告書抄録

# 挿 図 目 次

第1図	一ツ松城跡と周辺の遺跡	4
第2図	一ツ松城跡の調査区位置図	5
第3図	調査区全体平面図	6
第4図	区域1平面図	7
第5図	区域1土層断面図	7
第6図	区域2-1・2-2平面図	8
第7図	区域2-1土層断面図	8
第8図	区域2-2土層断面図	8
第9図	区域3平面図	9
第10図	区域3土層断面図	9
第11図	SE301遺構実測図	10
第12図	SK323遺構実測図	12
第13図	区域4平面図	13
第14図	区域4土層断面図	13
第15図	出土遺物実測図①	14
第16図	出土遺物実測図②	15
第17図	出土遺物実測図③	16
第18図	出土遺物実測図④	17
第19図	出土遺物実測図⑤	18
第20図	出土遺物実測図⑥	19
第21図	調査区周辺の大字名と沖代地区条里跡	23

# 表 目 次

出土遺物観察表	20
---------	----

# 写真・資料図版目次

写真図版一	遺跡空撮全景	27
写真図版二	区域1・区域3空撮全景	28
写真図版三	区域1検出・東西土層断面、SD101土層断面・完掘、区域2-1完掘、SP201・202完掘、 区域2-1南北土層断面、区域2-2完掘	29
写真図版四	区域3検出、SE301検出・土層断面・完掘、SK323検出・完掘、区域4完掘	30
写真図版五	出土遺物（3・4・11・16・17・19・22～24・26～29）	31
写真図版六	出土遺物（33・37・41・43・54・57・58・60・63・66・67・74、SK323貝類集合）	32
資料図版一	一ツ松城跡周辺地形と沖代地区条里跡の現況水利	33
資料図版二	一ツ松地区の土地利用図	34

## 第1章 調査の経過と概要

### 第1節 調査に至る経緯

一ツ松城跡は、大分県中津市大字一ツ松字楠本・屋敷に所在する。

調査は、都市計画道路外馬場錆矢堂線街路改良事業に伴い実施された。本事業は、県道中津吉富線の一部区画（中津市外馬場～一ツ松間の3.2km）を都市計画決定に基づき整備するものである。外馬場～牛神までの2.036mは整備済みである。牛神～一ツ松間の800mについては、大分県土木建築部中津土木事務所が事業者となって、平成28年度～令和6年度の予定工期で整備事業に着手することとなった。

事業区間内には、周知の埋蔵文化財包蔵地である石神城跡、一ツ松城跡が所在し、その南には大分県下最大級の条里遺構である沖代地区条里跡が位置している。このことから事業区間内において、埋蔵文化財の可能性が考えられることから関係機関と協議の上、令和元年度から令和4年度に試掘・確認調査を実施し埋蔵文化財の把握に努めたところである。

事業区画内の試掘・確認調査において埋蔵文化財の確認が認められ、石神城跡（令和元年度確認調査、令和2年度本発掘調査）、濱田遺跡（令和2年度試掘調査、令和3年度本発掘調査）が実施された。石神城跡、濱田遺跡の調査成果については、令和5年3月に大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第24集『石神城跡 濱田遺跡』として刊行されている。本報告の一ツ松城跡については、令和4年度に確認調査（令和4年11月1日・2日）を実施し、溝・土坑などの遺構や中・近世の遺物を確認した。確認調査の成果をもとに関係機関と協議を進め、令和5年6月12日から7月11日期间で本発掘調査を実施した。

### 第2節 発掘作業の経過

発掘作業は、埋蔵文化財センターが調査主体となって実施した。遺構埋土の掘り下げ、実測作業、写真撮影など支援業務については、民間調査機関へ一括して委託する体制をとった。委託内容は、①重機による表土除去、②人力による遺構検出、③人力による遺構埋土掘り下げ、④調査区土層・遺構実測、⑤調査区・遺構写真撮影、⑥現場管理などである。センター職員（調査員）は調査区の設定、調査区の土層堆積状況、遺構輪郭の確認、遺構埋土の確認、遺構の構造や遺物出土状態を把握し、受注業者の調査技師に各工程ごとに技術的指導を行い調査精度の確保と調査工程の管理に努めた。調査区については後述するが、区域1から区域4に設定し、各工程を進めた。

（発掘調査工程の概要）

令和5年6月12日（月）	重機による区域1～区域4の表土除去開始
6月14日（水）	重機による区域1～区域4の表土除去終了
6月15日（木）	区域2の調査開始
6月19日（月）	区域2の調査終了・埋め戻し
6月20日（火）	区域3・区域4の調査開始
6月29日（木）	区域4の調査終了
7月4日（火）	区域3の調査終了、区域1の調査開始及び終了
7月6日（木）	区域1・区域3・区域4の空中写真撮影
7月11日（火）	区域1・3・4の埋め戻し・機材撤収、調査終了

### 第3節 整理作業の経過

整理作業は、基礎作業と資料作成を一括して委託し、作業場所を埋蔵文化財センターにおいて実施した。委託内容は、①遺物水洗、②遺物注記、③遺物接合、④遺物復元、⑤遺物実測、⑥遺物拓本、⑦遺物観察表基礎データの作成、⑧遺物実測図のトレース ⑨遺物写真撮影及び、遺物取出、遺物区分・整理遺物収納等の各作業であった。整理作業は出土箱数13箱を対象として実施し、令和6年6月10日から8月30日に遺物水洗から遺物写真撮影の各作業を行った。

埋蔵文化財センター職員は、遺物図版・遺構図版の作成、遺構及び遺物写真図版の作成、原稿執筆、編集作業を行った。

報告書作成は図版作成、原稿執筆を令和6年9月1日から開始し、12月11日に終了した。入稿は令和6年12月13日に行い、初稿を12月27日に受領した。令和7年2月17日に校了し、2月28日に報告書が納品された。

## 第1章 調査の経過と概要

### 第4節 調査組織の構成

一ツ松城跡の発掘調査に係る体制は以下のとおりである（所属・職名は調査当時）。

調査主体 大分県教育委員会  
調査機関 大分県立埋蔵文化財センター

#### 令和5年度 本発掘調査

調査責任者	後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター所長）
調査総括	染矢和徳（同 調査第一課長兼調査第二課長）
調査事務	上條年明（同 副所長兼総務課長）
	山田哲也（同 総務課主査）
	岩男修太（同 総務課主事）
調査担当	吉田 寛（同 調査第二課専門員）
	山本哲也（同 調査第二課主査）
発掘調査支援業務受託者	株式会社九州文化財総合研究所（調査技師 永田裕久、調査助手 平野和行）

#### 令和6年度 整理作業・報告書作成

調査責任者	後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター所長）
調査総括	横澤 慈（同 調査第一課長）
調査事務	上條年明（同 副所長兼総務課長）
	山田哲也（同 総務課副主幹）
	岩男修太（同 総務課主事）
調査担当	染矢和徳（同 参事兼調査第二課長）※整理作業総括
	森 春奈（同 調査第二課主事）※整理作業委託監理
	山本哲也（同 企画普及課主査）※整理作業・報告書作成
整理作業受託者	株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 木村藍子）

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

中津市は、大分県北部、福岡県との県境の都市で、平成17（2005）年に旧中津市と下毛郡旧4町村（三光村・本耶馬溪町・耶馬溪町・山国町）が合併し、面積491.1km<sup>2</sup>、現在人口約8万3千人である。北は周防灘に面し、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。

英彦山に源を発する一級河川山国川が、市内を南から北へ貫流し流域一帯を潤す。上中流域は山々に囲まれた地形で、山国川やその支流により開析された河岸段丘上に集落が営まれている。近世の学者・頼山陽により絶景と称された奇岩・奇勝の多くは、国名勝耶馬溪として指定を受けている。下流域は沖積作用による県北最大平野「沖代平野」と洪積台地「下毛原台地」が広がる。周防灘沿いに瀬戸内海最大の干潟「中津干潟」が形成されている。「沖代平野」は扇状地形を成し、三口を扇頂部に沖積地河口部に向かって緩斜する。「沖代平野」は、山国川の旧河道、自然堤防、平野、砂州の地形から成り、一ツ松城跡周辺は平野に立地する（巻末資料図版一参照）。

### 第2節 歴史的環境

第1図は、一ツ松城跡（1）と周辺の遺跡の位置を図示したものである。

旧石器時代は、市域では旧石器時代の遺跡は確認されていないが、沖代平野周辺部の台地にて、才木遺跡・大坪遺跡・法垣遺跡で旧石器資料が確認されている。

縄文時代は、上畑成遺跡では早期の無文土器が出土している。黒水遺跡では早期後半～前期にかけての陥し穴が検出されている。市域での遺跡数は後期から増大し、集落跡の佐知遺跡や入垣貝塚を伴う集落跡のボウガキ遺跡、女体像と見られる土偶2体が出土した高畑遺跡がある（5）。法垣遺跡では複数の掘立柱建物跡を検出しており注目される。

弥生時代の集落は台地や自然堤防上に展開する。一ツ松城跡周辺では、沖代地区条里跡（11）では集落が、沖代小学校校庭遺跡（13）では水田跡が確認されている。

古墳時代にはいと、沿岸部や山国川沿いに古墳、横穴墓が築かれ、微高地には集落が営まれる。5世紀中頃には山国川に面する勘助野池遺跡で方形周溝墓が造営され、5世紀後半から7世紀前半にかけて上ノ原横穴墓群が展開する。亀山古墳（17）は下毛原台地に立地する前方後円墳であり円筒埴輪片が出土している。集落は高畑遺跡（5）が、東濱遺跡（14）では道路状遺構を検出している。市の南部に位置する野依・伊藤田窯跡群は、県内最大の須恵器窯跡群で8世紀にかけて生産が行われている。

古代の主要な遺跡は、沖代平野を東西に横切る古代豊前道（勅使街道）沿いに展開する。白鳳系寺院の相原廃寺の創建、勘助野池遺跡・相原山首遺跡では火葬墓が形成される。8世紀前半には古代豊前道を南限とし、沖代地区条里跡（11）が形成されたと考えられている。条里を見下ろす洪積台地上には古代下毛郡衙の正倉域と考えられる長者屋敷官衙遺跡が立地する。

中世では市内各所に周囲を堀や土塁を囲んだ城館が認められる。石堂池遺跡（21）や亀山古墳（17）等で中世城館に伴う堀を検出している。一ツ松城跡の西側に隣接する、石神城跡（9）は中世城館として関連付けられる遺構は確認されていない。13世紀～16世紀にかけて集落的な要素をもつ遺構が形成され、近世で中世村落が集村し城館化したとみられる。濱田遺跡（10）は近世の洪水砂層に被覆された15・16世紀代を中心とする水田畦畔、水田が検出されている。

16世紀末、豊臣秀吉から豊前のうち下毛郡等6郡を与えられた黒田孝高が入封し中津城（2）が築城される。石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭である。その後細川氏、小笠原氏を経て奥平氏が入り、明治4（1871）年の廃藩置県を迎える。なお、城下町（3）は小笠原氏が入部する寛永9（1632）年に完成をみる。

今回調査を実施した一ツ松城跡は、明治36（1903）年に刊行された『豊前古城誌』（熊谷克己著）によると、薦神社大宮司の池永重澄の三男にあたる一松重郷が築城した、と記すのみで具体的な様相は不明であり、土塁等との遺構は現地表面からは確認ができない状況である。現在の地名である「一ツ松」は、近世以降、一ツ松村として成り立ち、大字名として継承されている。





国土地理院2万5000分の1地形図「中津」に加筆

- 1 一ツ松城跡（中世） 2 中津城跡（近世、県史跡） 3 中津城下町遺跡（近世） 4 中津城おかい山（近世、県・史跡） 5 高畑遺跡（縄文～古代） 6 宮永城跡（中世） 7 豊田小学校校庭遺跡（弥生・古墳） 8 古濱東遺跡（古墳・近世） 9 石神城跡（中世） 10 濱田遺跡（中世） 11 沖代地区条里跡（弥生～近世） 12 中臣城跡（中世） 13 沖代小学校校庭遺跡（弥生） 14 東濱遺跡（古墳・中世） 15 合馬遺跡（古墳・中世） 16 大道端遺跡（古墳・中世） 17 亀山古墳（古墳） 18 鴻の巣城跡（中世） 19 下池永遺跡（弥生・古墳・中世） 20 池永城跡（中世） 21 石堂池遺跡（古墳・中世） 22 上池永遺跡（弥生・古墳） 23 上池永矢筈遺跡（中世）

第1図 一ツ松城跡と周辺の遺跡



## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の概要

一ツ松城跡の本調査地は、現在市街地化し、周囲には住宅等が連ねており、また構造物や地中埋設物を避け、周囲の安全確保をした発掘調査を行う必要があった。調査では、区域1～区域4の計4調査区を設定した（第2図）。なお、区域2は、区域2-1と2-2に分けて調査区を設定している。各区域とも調査に生じる排土置場を確保して調査を進めた。

設定した調査区については、世界測地系の座標に基づき10m方眼のグリッドを設定し、北から南に向かってアルファベット、西から東に向かってアラビア数字を振った（第3図）。

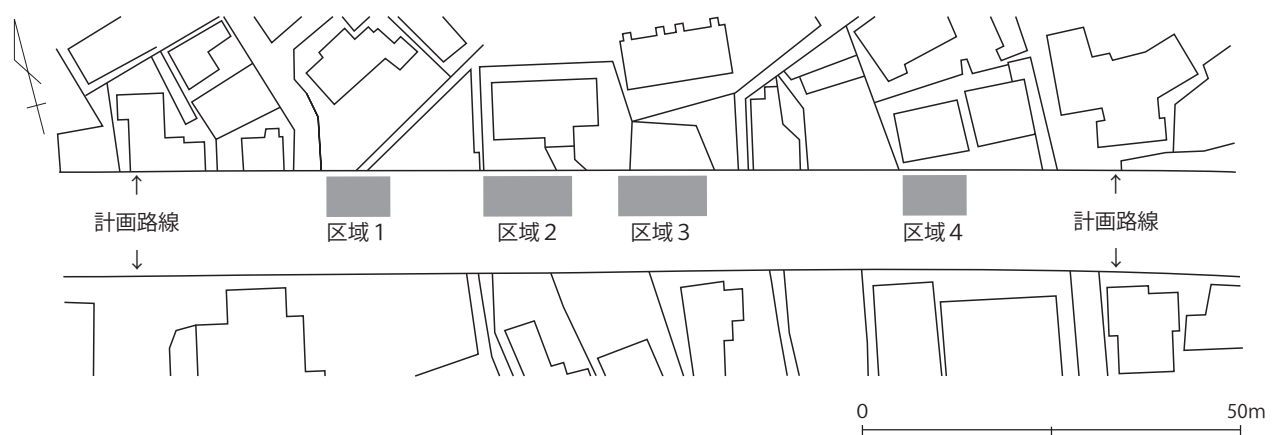
各調査区の調査にあたっては、確認調査の成果から遺構検出面より上面は近現代の盛土層であり、遺物包含層が認められないことから、重機による掘削は遺構検出面まで行った。重機の機械掘削後は、作業員の人力による遺構検出、掘削を行った。各区域で検出した遺構や近現代のカクランについては全て、S番の3ケタ数字を用いて、数字の先頭は検出した区域を付した。例えば、区域1で検出した遺構は「S101」である。なお、調査終了後の整理作業において番号はそのまま踏襲したが、先頭のS番は遺構の性格を示す略記号に変更をしている。溝状遺構の性格を示す遺構ならば「SD101」である。

各区の調査で検出した土層、遺構については、適宜、実測・写真撮影などの記録作業を行った。調査区の完掘後、ドローンによる空中写真撮影を実施した。撮影終了後、調査区を重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

一ツ松城跡の発掘調査は総面積147㎡である。各調査区の層序は共通して、表土はバラスなどを含む現代の造成土であり、層厚0.5m～1mである。表土より下の層は造成土が主体で、幾つかの層に細分ができる。遺構検出面は、現地表面から1.0m～1.5m下である。

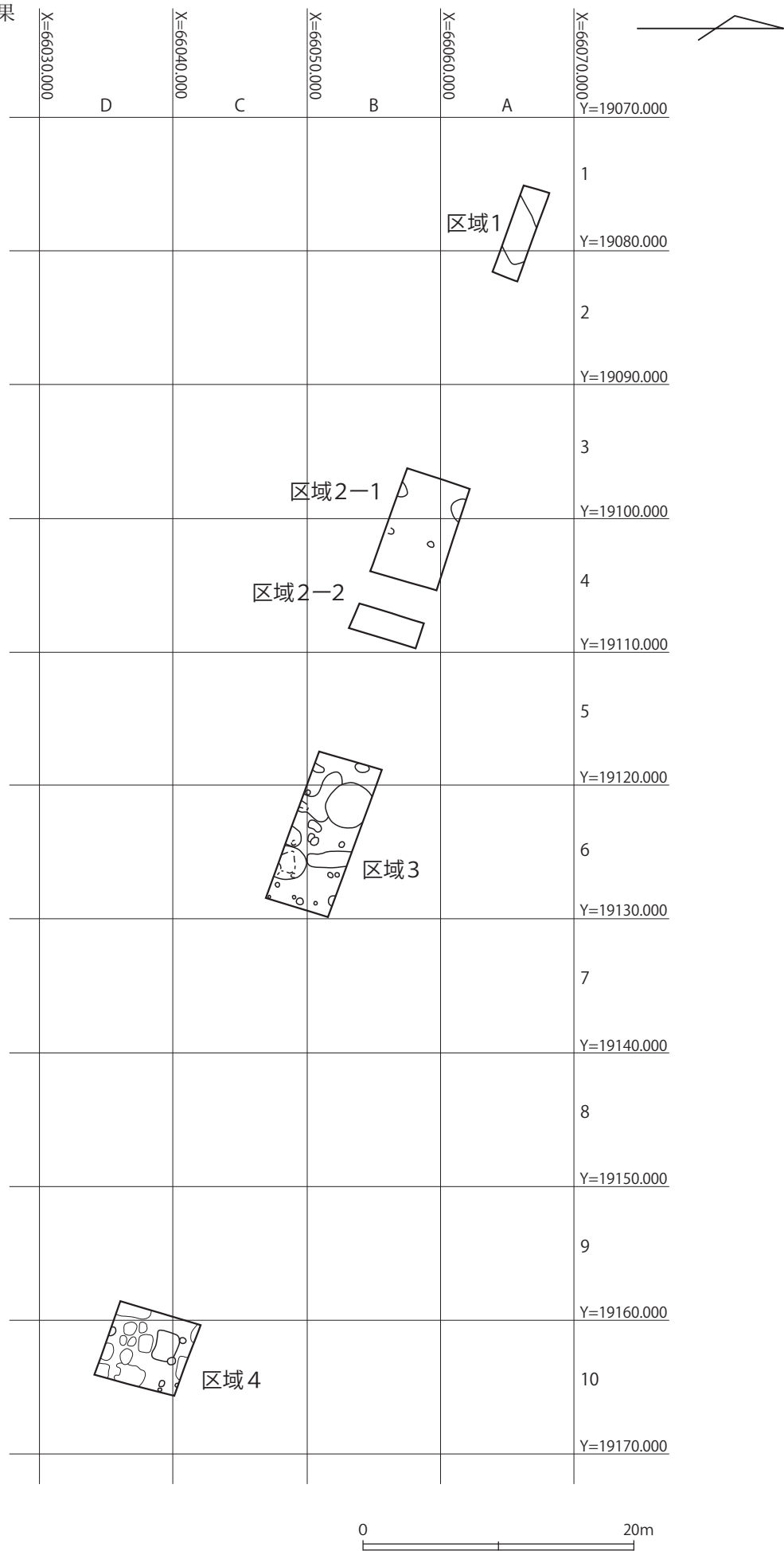
各区域とも、遺構検出面において近現代のカクランが多く認められた。そのような状況のなか、区域1では溝跡・ピット、区域2-1ではピット・土坑、区域3ではピット・土坑・井戸跡、区域4ではピット・土坑などの遺構を検出した。なお、区域2-1、区域4では出土遺物が皆無であった。区域1、区域3の各遺構から、近世を主体とする陶磁器・土器が出土した。区域3で検出した井戸跡（SE301）では、多量の近世陶磁器・土器が出土した他、流れ込みの性格をもつが、中世後期の土器が出土している。

今回の調査は小規模な調査面積であったが、中世における一ツ松城跡に関連する、城館に伴う遺構は検出できなかった。近世を主体とする遺構を確認し、一ツ松城跡周辺では発掘調査履歴が乏しかったが、近世における集落の様相の一端を明らかにすることができた。次節以降は各区域の調査について触れる。



第2図 一ツ松城跡の調査区位置図（1/1000）





第3図 調査区全体平面図 (1/450)

## 第2節 区域1の調査

区域1は、本調査区の最西端に位置し、長軸7m、短軸2mの長方形を呈する。調査面積は12㎡である。調査区ほぼ中央にて溝跡（SD101）1条を検出した（第4図）。遺構検出標高は2.6mである。

## ① 調査区の土層（第5図）

基本層序は、現代の造成層（第1・2層）の下は、旧水田層（3層）が認められる。上面は削平を受け、層厚0.1～0.2m程度であるが、ほぼ調査区全域にみられる。3層・4層の下が遺構検出面である。地山は黄褐色土（8層）で、東から西に向かって緩斜する。遺構は地山を掘り込んで、ピット1基（土層断面のみ確認）、溝1条を構築している。

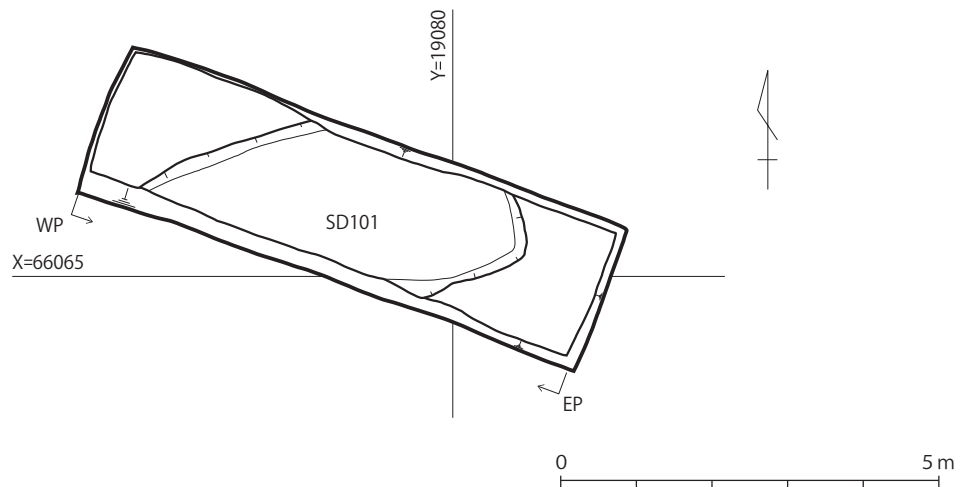
## ② 遺構と遺物（第4図・第15図）

## ・SD101

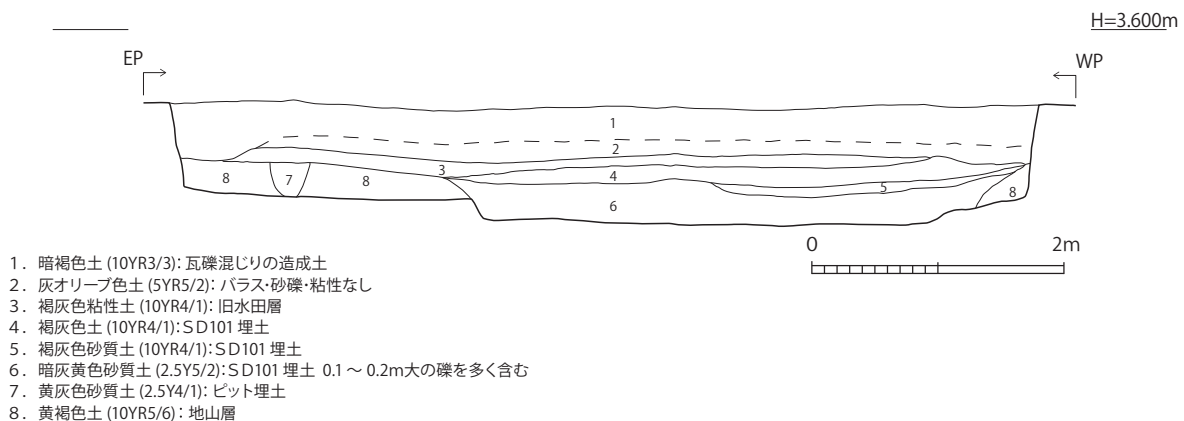
調査区ほぼ中央に検出され、調査区外へ南北に延びる。幅は3m、深さ0.7mである。遺構埋土は3層に分層ができ（第5図4～6層）、6層では0.1m～0.2m程度の小礫を含んでいる。溝の立ち上がりは緩斜し、床面はほぼ平坦である。

第15図1～6は、SD101出土遺物である。1・2は中世所産の遺物である。1は瓦器碗の口縁部片。2は土師質土器釜で、口縁部下に鐙が付く。12世紀代の所産である。3～6は近世所産の遺物である。3は肥前青磁皿である。口縁部から底部に向かって緩斜する。内面は蛇ノ目釉剥ぎである。時期は17世紀後半代。4は肥前染付瓶の口縁部である。口縁部は垂直気味に立ち上がる。鉄釉がかかり頸部内面は露胎である。時期は18～19世紀代。5は肥前白磁の小坏である。見込に草花？を描く。時期は18世紀前半代。6は土師質土器捏鉢で宇佐高村焼である。口縁部は緩やかに外反し、内面は横方向のヘラミガキを施す。

以上の出土遺物から、溝の性格から中世・近世前半頃の流れ込みがみられ、時期は18～19世紀代と考えられる。



第4図 区域1平面図（1/100）



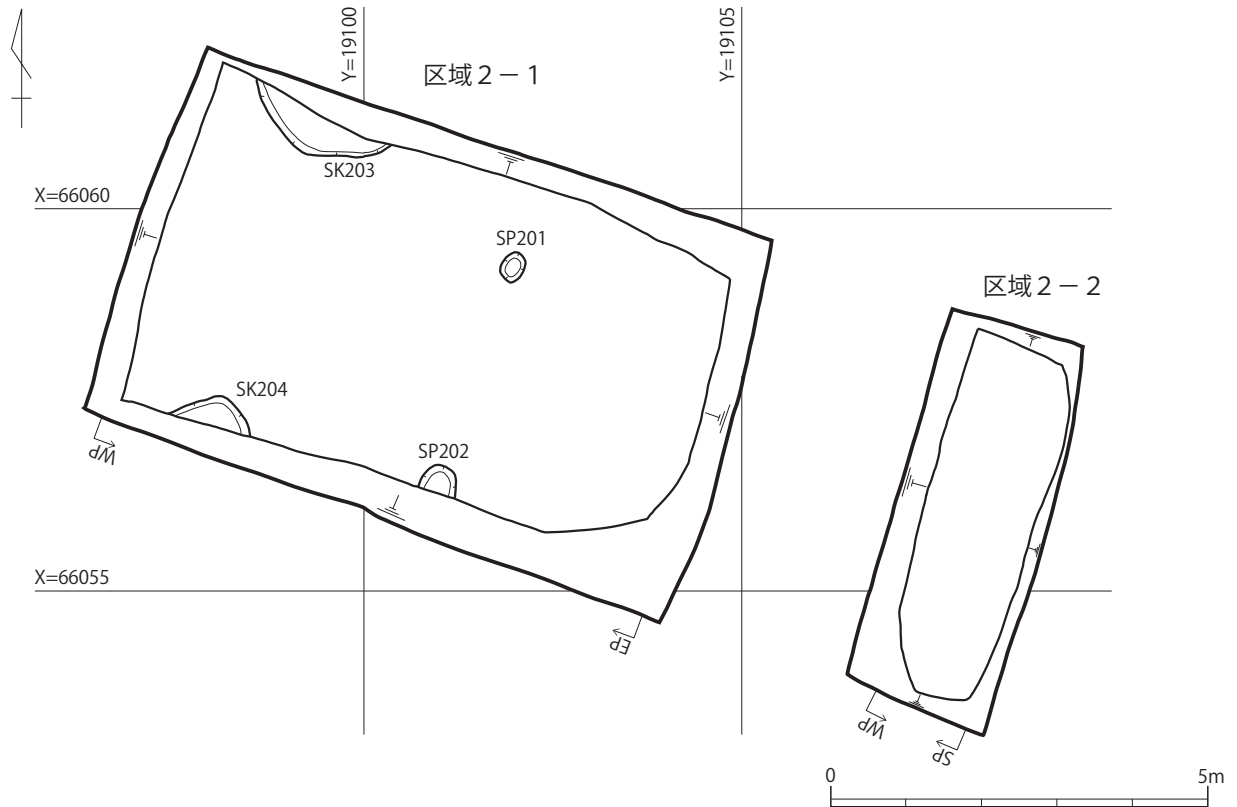
第5図 区域1土層断面図（1/60）

### 第3節 区域2の調査

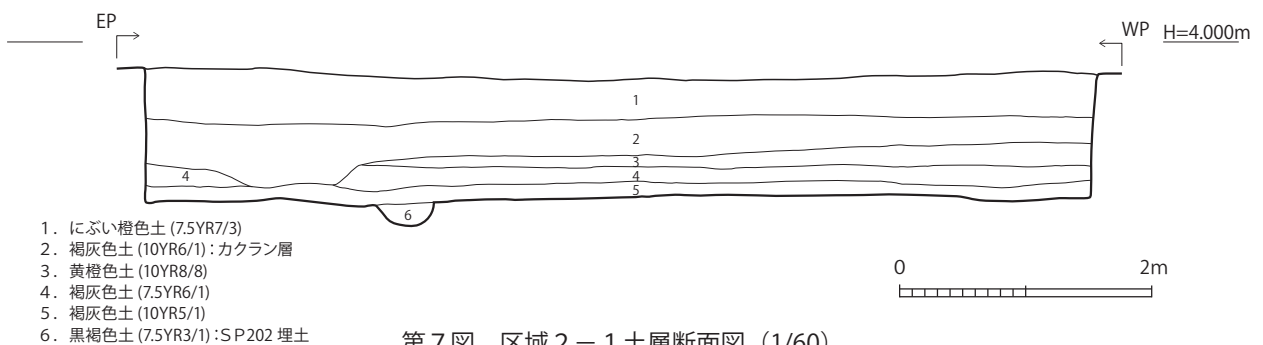
区域2は、区域1から東20m先に位置する。調査の都合上、調査区を2-1・2-2の2箇所分けて調査を進めた。区域2-1は長軸8m、短軸5mの正方形を呈し、区域2-2は長軸5m、短軸2mの長方形を呈し、調査総面積は38㎡である。区域2-1にてピット2基・土坑2基を検出した（第6図）。遺構検出標高は2.8mである。区域2-2では、遺構が検出できなかった。

#### ① 調査区の土層、遺構（第6～8図）

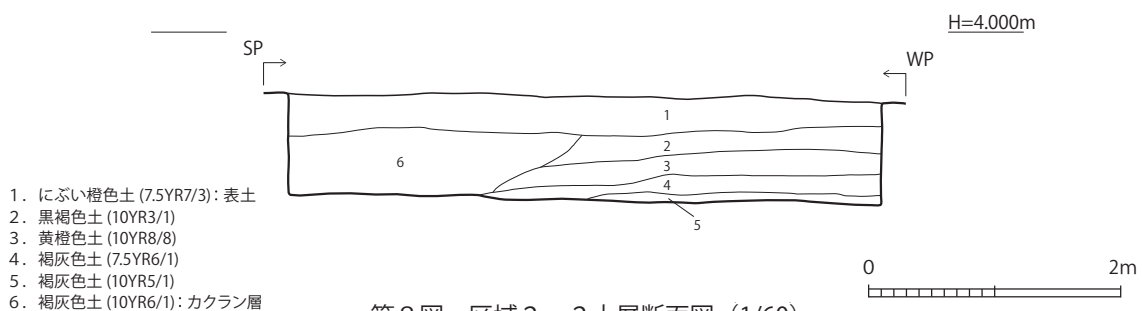
区域2-1の基本層序は、現代の造成層（第7図1・2層）の下は、褐灰色をベースとした土層が堆積する（第7図3～5層）。地山は褐灰色土で、ピット・土坑を検出している。ピット・土坑埋土は黒褐色土である。ピットの径は0.3m、深さ0.2mで、土坑の径は1m+α、深さ0.2mである。いずれの遺構も出土遺物がなかったため時期は不明である。



第6図 区域2-1・2-2平面図（1/100）



第7図 区域2-1土層断面図（1/60）



第8図 区域2-2土層断面図（1/60）

#### 第4節 区域3の調査

区域3は、区域2から東10m先に位置する。区域3は長軸12m、短軸5mの長方形を呈し、調査面積は61㎡である。区域3は、他の調査区と比して良好に遺構が遺存し、調査区全体において遺構を確認した。検出した遺構内容として、井戸跡（SE301）1基、ピット15基、土坑8基を検出した（第9図）。遺構検出標高は3.2mである。

##### ① 調査区の土層（第10図）

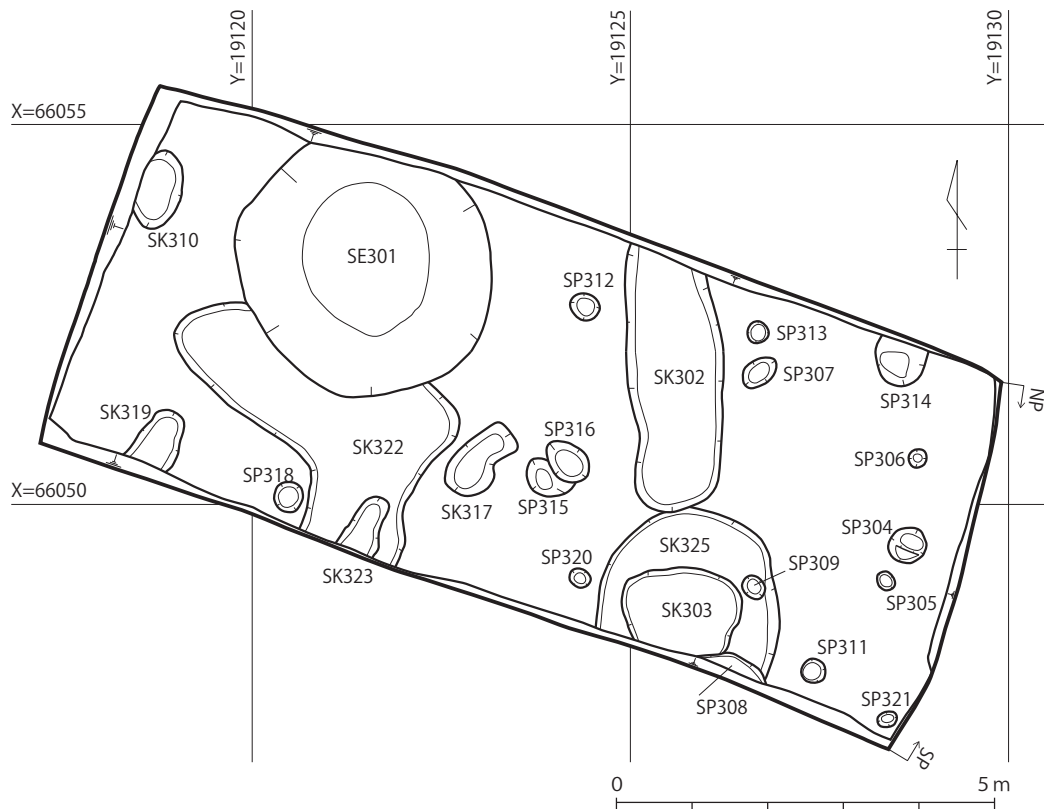
基本層序は、現代造成土及びカクラン層（1・2層）がみられ、5層が遺構検出面である。地山はにぶい黄橙砂質土で北から南に向かって地形的に緩斜する。

##### ② 遺構と遺物

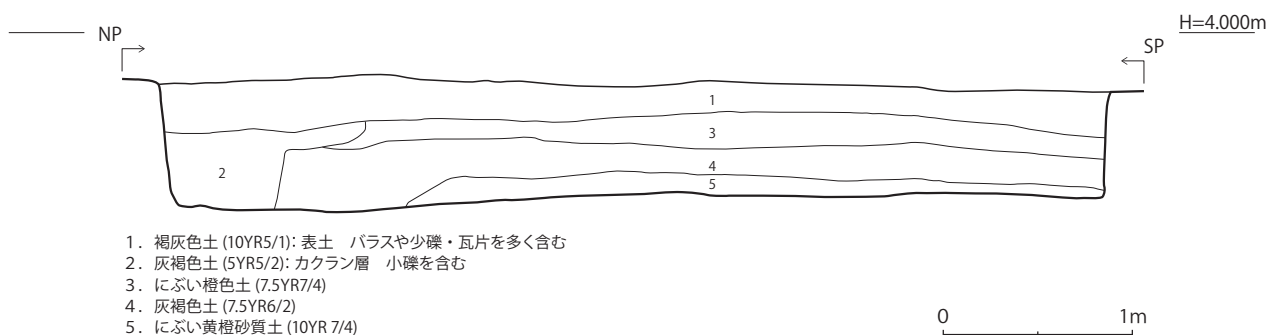
##### ・SE301（第9図・第11図・第15図～第19図）

調査区北西に位置し、井戸跡の北側上端は調査区外に延びる。平面形は円形プランを呈し、径3.5m、深さ0.8mを測る。井戸の底面幅は1.5mである。井戸の形状は、素掘りであり、掘り方は底面から斜上方に立ち上がる。調査時、半裁して土層断面を確認したところ、こぶし大の礫が上面から底面にかけて認められ、陶磁器・土器など遺物を多く含んでいた（写真図版四を参照）。この状況から、井戸を埋めるに際し、時間を経ずに一度に埋め戻したことが分かる。

つぎにSE301出土遺物について触れる（第15図7～18、第16図19～28、第17図29～43、第18図44～54、第19図55～61）。先述したとおり、多量の礫とともに多くの遺物が出土しており、その数量は遺物コンテナ数10箱を数えた。遺物は、近世後期の陶磁器・土器・瓦を中心として、中世後期・近世初頭の遺物がみられる。後者の遺物は流れ込みである。なお、瓦は細片の平瓦が主体であったため、記述のみにとどめる。



第9図 区域3平面図（1/100）



1. 褐灰色土 (10YR5/1): 表土 バラスや少礫・瓦片を多く含む
2. 灰褐色土 (5YR5/2): カクラン層 小礫を含む
3. にぶい橙色土 (7.5YR7/4)
4. 灰褐色土 (7.5YR6/2)
5. にぶい黄橙砂質土 (10YR 7/4)

第10図 区域3土層断面図（1/40）

### 第3章 調査の方法と成果

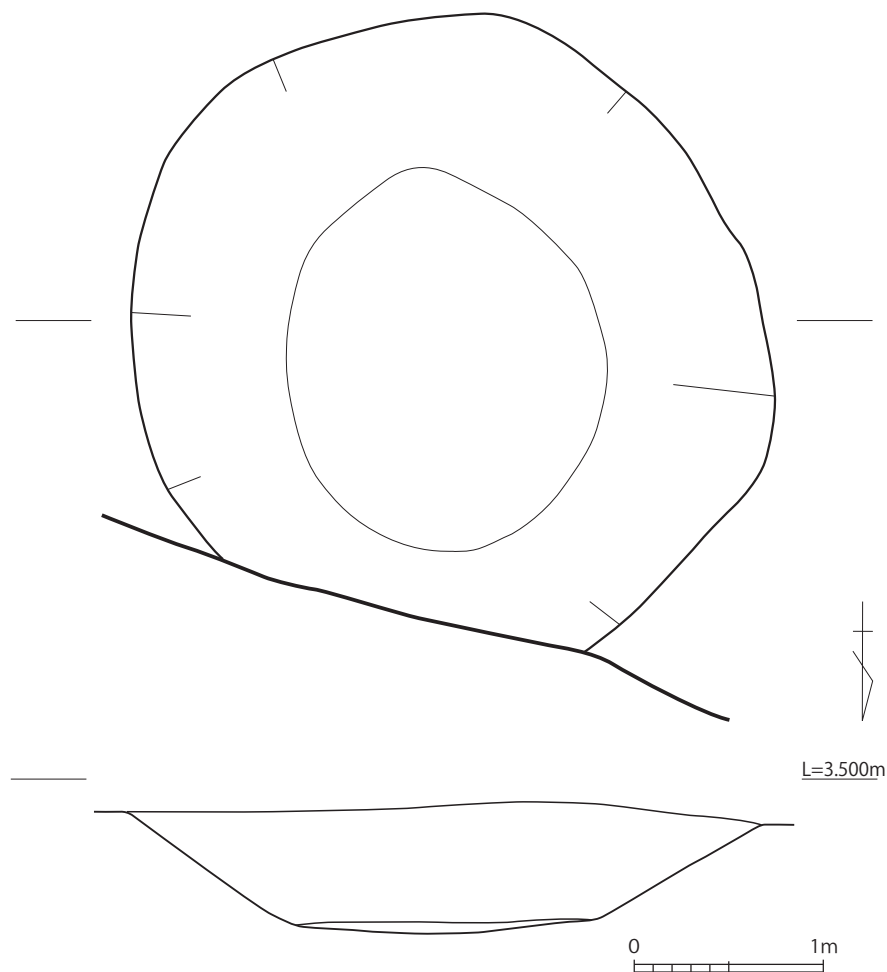
7・8は土師器蛸壺である。いずれも手づくねで厚手である。胴部内外面ともユビオサエが顕著にのこる。8の形状は丸みを呈し中央に穿孔が認められる。古墳時代～古代と考えられるが、時期は不明である。

9は12世紀代を中心とする土師質土器鍋。口縁部が肥厚し体部の器壁は薄い。

10～19は瓦質土器であり、中世後期（15世紀～17世紀前半）を主体とする。10・11は鍋で口縁部が短く外反し体部は直線的である。いずれも外面体部はヘラケズリを施す。11の体部内面にはヘラによる線刻が認められる。12は鉢と考えられ、口縁部は短く外反し端部の面取りを行う。体部内面には不定方向のヘラミガキを施す。13・14は播鉢で、器形の特徴から豊前南部・豊後北部地域を中心に出土分布する。13は片口の播鉢で、口縁部が垂直気味に立ち上がるのが特徴で、外面はヘラケズリ、内面は緻密な播り目を施す。14は見込と体部の境に渦巻状のヘラ描き、内面体部は播り目を施す。15・16は防長系の瓦質土器である。15は口縁部断面が三角形を特徴とする播鉢。16は甕形火鉢で口縁部が垂直気味に立ち上がり、口縁部外面にタテ方向の沈線を等間隔に施す。17は深鉢形の火鉢。口縁部端部は外方に肥厚し、口縁部下に突帯が付く。口縁部と突帯間に列点文スタンプを施す。なお列点文スタンプは宇佐市・下林遺跡Ⅱ区SE-1（17世紀前半頃）、同市・木内遺跡1次Ⅱ区S003（17世紀前半頃）、中津市・諫山遺跡SD006（17世紀後半頃）にて出土事例がある（宇佐市教育委員会1994、大分県教育庁埋蔵文化財センター2014・2016）。18は深鉢形火鉢の脚部である。19は風炉の脚部。脚部は垂直気味に立ち上がり、胴部へと内方気味に立ち上がる。脚部外面に七宝文、蓮華座に蓮弁文スタンプを施す。20は須恵質土器甕の胴部で、外面に格子目叩きを施す。亀山焼系と考えられる。21は備前焼甕の胴部で、外面には格子状のヘラ記号が認められる。20・21とも、瓦質土器と同じく中世後期を中心とする時期と考えられる。

22～61は近世所産の土器・陶磁器、土人形等であり、種別、器種にバラエティがある。以下、種別・器種ごと順において報告する。

22～30は磁器である。22は肥前染付丸碗で、外面体部に二十四孝の一人、孟宗の筍掘りの逸話（孟宗竹の語源）を題材とした様子を描く。時期は1780～1800年代。23は肥前染付の筒形碗で、口縁部・体部は直線的で屈曲して底部に至る。外面体部には菊花・格子が、口縁部内面は二重圈線を描く。時期は19世紀代。24は肥前系染付の端反碗



第11図 SE301遺構実測図 (1/40)

で、口縁部端部が外反する。外面体部には草花を描く。時期は1810～1860年代。25・26は肥前系染付の広東碗である。25の外面は草花、内面は圈線を描く。26は口縁部から底部まで器形が窺える資料で、口径11.2cm、器高6.8cm、高台径5.8cmを測る。外面は草花、見込は壽の崩し字を描く。時期は19世紀から幕末である。27は肥前染付の皿で、高台の形状は糸切細工による輪花形を呈する。外面は草花、内面は草花、四方襷を施す。時期は1660～1680年代。28は肥前系青磁皿で、口径14.4cm、器高4.0cm、高台径7.8cmを測る。蛇ノ目高台を呈し、見込には三足ハマ痕が残る。時期は18世紀後半～19世紀代。29は肥前染付の段重で、積み重ねて使用する器である。口縁部から体部は直線的である。外面は草花、弦を施す。口縁部端部及び体部と底部の境部分は露胎である。時期は18世紀後半～19世紀代。30は肥前系染付の仏飯器である。外面に風景を描く。脚台裏は露胎である。時期は19世紀代。

31～45は陶器である。31は信楽焼小碗である。口縁部が緩やかに外反する。時期は19世紀前半～中頃。32は産地不明の碗である。釉調は暗緑色を呈する。33は産地不明の陶胎染付碗である。口径10.7cm、器高7.7cm、高台径4.9cmを測る。外面には唐草を描く。釉調は灰褐色を呈する。時期は18世紀後半～19世紀代か。34は産地不明の蓋。外面に茶褐色の釉がかかる。時期は18世紀～19世紀か。35は唐津焼皿で、砂目唐津といわれるもので見込に重ね焼き痕が残る。時期は1600～1630年代。36は肥前内野山窯の皿で銅緑釉を呈し、見込は蛇ノ目釉剥ぎである。時期は17世紀末～18世紀前半代。37は産地不明の爛徳利で、器形が窺える資料である。口径3.7cm、器高22.7cm、底径7.6cmを測る。胴部外面はぼ中央に草花（カ）を描く。釉調は浅黄色を呈し、外面底部は露胎である。38・39は産地不明の瓶である。釉調は、38が茶灰色、39は黒褐色を呈する。40は産地不明の鉢か。底部外端が張り出す。41は関西系の土瓶、茶褐色の釉を施す。時期は18世紀後半～19世紀。42・43は堺産播鉢で、器高は42が14.7cm、43が9.5cmを測る。いずれも外面はヘラケズリ、内面は放射状の播り目で、色調は赤褐色を呈する。時期は42が18世紀末頃～19世紀代。43が19世紀代。44は唐津系の甕、口縁部端部が内方に張り出す。口縁部上端に伏せ焼痕が残る。色調は茶褐色である。時期は18世紀後半～19世紀。45は肥前系の甕で、口縁部が肥厚する。胴部内外面に格子目叩きが残る。時期は18世紀後半～19世紀。

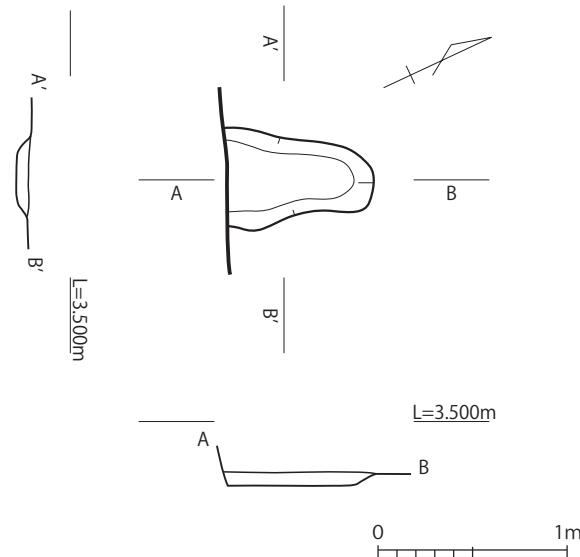
46～58は土器である。46は土師質土器皿で、外面体部にヘラケズリ調整であることから近世として取り扱う。47～50は土師質土器焙烙である。47は口縁部内側に段をつくる。48・49は口縁部下に把手が付く。50は胴部外面の上面に種子圧痕が残る。51～57は宇佐高村焼で土師質土器である。51～55は捏鉢。51は体部片で、外面中位に幅広の方形状の突帯が付く。捏鉢に付く突帯の形状については、後述する刻み目を施すタイプの出土事例が多く、幅広の方形状突帯は少ない状況である。中津城下町遺跡殿町地区SK2に出土が見られ（中津市教育委員会2004）、共伴する陶磁器から19世紀後半頃に位置付けられる。本資料については体部片であるため、19世紀代としておきたい。52は底部片で見込にヘラミガキ調整を施す。53～55は外面体部下半に刻み目突帯を貼り付け、内面はヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。口縁部の形状から、外反するタイプ（54）と端部が肥厚するタイプ（53・55）に分かれ、前者が18世紀代、後者は19世紀代と考えられる。56は壺で、口縁部が垂直気味に立ち上がる。57は甕で、口縁部端部が外方に張り出す。内外面ともナデ調整である。高村焼の甕の出土事例は少ない状況であるが、宇佐市木内遺跡1次Ⅱ区SK003出土資料（18世紀前半頃）と類似しており（大分県教育庁埋蔵文化財センター2014）、本資料も近接する時期と考えられる。58は瓦質土器火鉢で、胴部外面は断面トタン状の平行沈線文を施し、また胴部中位に型打成形による獅子頭の把手が付く。色調は暗灰褐色をおびる。なお中津城下町遺跡殿町地区の5区SK32にて出土事例があり（中津市教育委員会2004）、中津城下町遺跡資料は19世紀前半～中頃に位置付けられている。本資料については19世紀代としておきたい。

59～61は土製品である。59は完形の管状土鍾であるが、時期は不明である。60は土人形で、天神様（菅原道真公）である。型打成形で頭部は欠損する。底部に穿孔が認められる。61は用途不明の土製品で、平面形は方形状を呈する。断面形は内側に向かって窪んでおり、底面に穿孔が認められる。

#### ※参考文献

- 宇佐市教育委員会1994『一般国道10号線 宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書』（下林遺跡Ⅱ区）
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター2014『西株遺跡・春畑遺跡・カシミ遺跡・今成遺跡・木内遺跡・丸尾城跡』
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター2016『諫山遺跡 本文・遺物図版編』
- 中津市教育委員会2004『中津城下町遺跡殿町地区発掘調査報告書』





第12図 SK323遺構実測図 (1/40)

・SK322・SK323 (第9図・第12図・第19図・第20図)

調査区北西に位置し、SK322はSE301に切られる。平面形は不定形を呈し最大幅4m、深さ0.2mを測る。SK323はSK322内にて検出した遺構で、調査区外に延びる。長軸1.2m+α、短軸0.4m、深さ0.2mである(第12図)。SK323範囲内において、多種多様の貝類がまとまって多く出土した。貝類を同定した結果、アサリ、サルボウ、テングニシ、ツメタガイ等であることが分かった(写真図版六を参照)。いずれの貝類は、水深10m内の浅海に生息しており、縄文時代から今日に至るまで食に供されている。出土状況から食物残渣としてまとめて廃棄したと考えられる。

なお、SK322、SK323とも近世所産の土器・陶磁器が出土しているが、調査終了後の整理作業にて双方の遺構間において接合関係の資料が多く見られた。このことからSK322とSK323は同一遺構と考え、SK323を中心に報告する。

SK322出土遺物について触れる(第19図62～65)。62～64は磁器である。62は肥前染付くらわんか碗で、外面に梅樹雪輪文が、高台裏に大明年製の崩し字がみられる。時期は18世紀後半。63は肥前系染付の広東碗で、外面体部に草花文(カ)、内面体部に三重圏線、見込に鷺の崩し字(カ)がみられる。時期は19世紀から幕末である。64は肥前染付の筆筒か。筆筒は筆を立て置く器である。菊花の透かし彫り、葉の文様を施す。時期は18世紀後半。65は陶器の萩焼碗で、釉調は灰白色を呈する。時期は19世紀である。

つぎにSK322と323の遺構間接合した資料について触れる(第20図66～70)。66～70は陶器である。66・67とも関西系である。66は土瓶で、外面は白色のイッチン掛けと鉄絵による草花の文様を施す。黄褐色の釉がかかる。67は行平で、胴部外面の上半にヨコ方向の飛び鉋調整で、把手が付く。時期は19世紀。68は唐津系の播鉢。口縁部が肥厚する。69・70とも宇佐高村焼で土師質土器である。69は焙烙で、口縁部が内彎気味に立ち上がり、口縁部外端に耳が付く。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキを施す。外面に煤が付着する。19世紀代と考えられる。70は捏鉢で外面体部下半に刻み目突帯が、内面はヘラミガキを施す。口縁部内面に赤色顔料を塗る。口縁部の形状から19世紀代か。

・その他の遺構出土遺物

ここではその他の遺構から出土した遺物について触れる(第20図71～73)。71(SK310)は須恵器甕の胴部。内外面に格子目及び同心円文叩きが残る。72(SK303)は瓦質土器の片口播鉢で16世紀代と考えられる。外面はヘラケズリ、内面は5本単位の播り目を放射状に施す。73(SP320)は土師質土器土鍋で、口縁部が肥厚する。12世紀代。いずれの遺構から出土した遺物は、区域3のSE301、SK322・323の中心時期を考慮すると流れ込みによるものと考えられる。

つぎに表土より出土した遺物を触れる(第20図74)。74は土製の人形で稲荷社の完形品である。型作りによる成形で、中央に稲荷神、左右に神使の狐を表す。長さ3.2cm、幅2.9cm、厚さ1.2cmを測る。底部に穿孔が認められる。時期は不明であるが近世所産である。

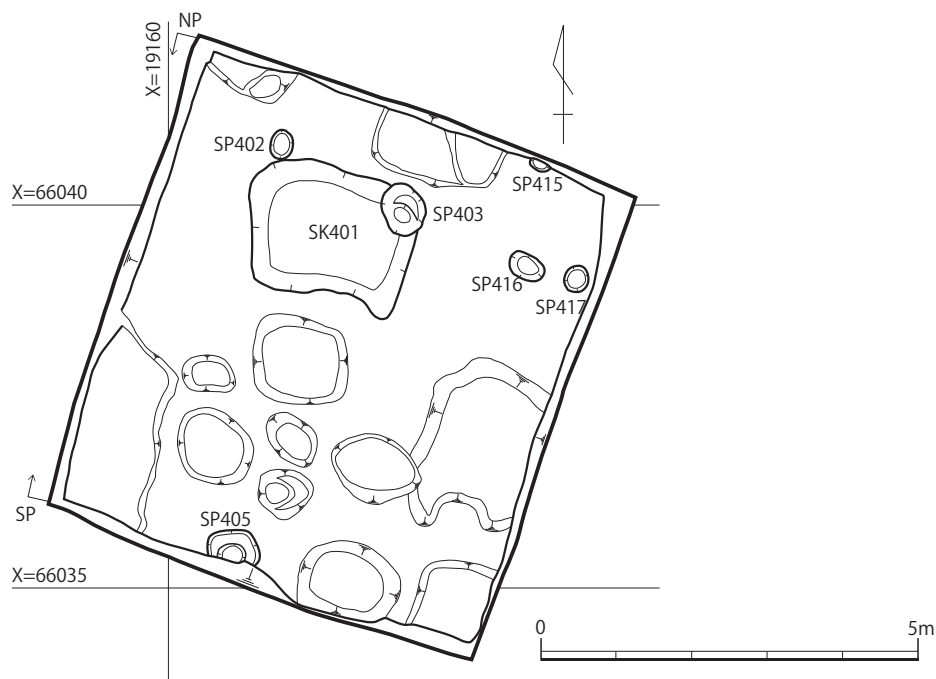
## 第5節 区域4の調査

区域4は、区域3から東32m先に位置する。区域4は長軸7m、短軸6mの長方形を呈し、調査面積は36㎡である。区域4では、調査区全体において近・現代のカクランを確認するなかで、ピット6基、土坑1基を検出した（第13図）。遺構検出標高は3.5mである。

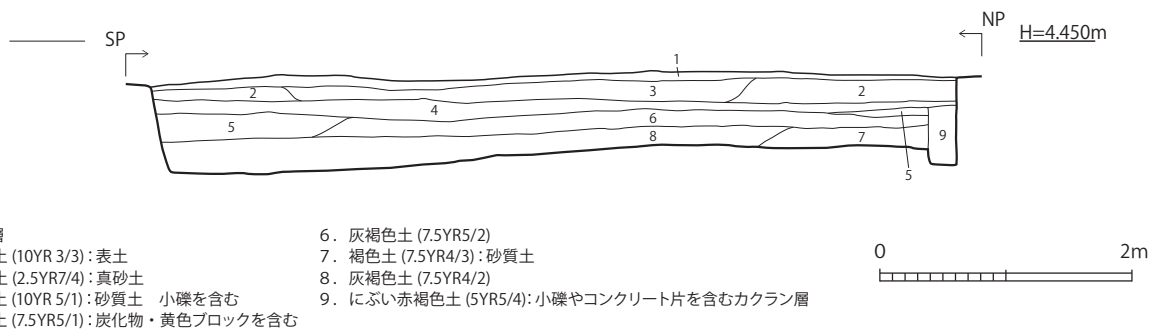
## ① 調査区の土層、遺構（第13・14図）

基本層序は、現代造成土及びカクラン層（1・2層）がみられ、7・8層が遺構検出面である。地山はにぶい黄橙褐色砂質土で北から南に向かって地形的に緩斜している。

検出したピット・土坑の埋土は黒褐色土である。ピットの径は0.2～0.3m、深さ0.2mで、土坑（SK401）の径は2.2m、深さ0.3mである。いずれのピット、土坑の遺構は出土遺物が皆無のため、時期は明らかにしえない。



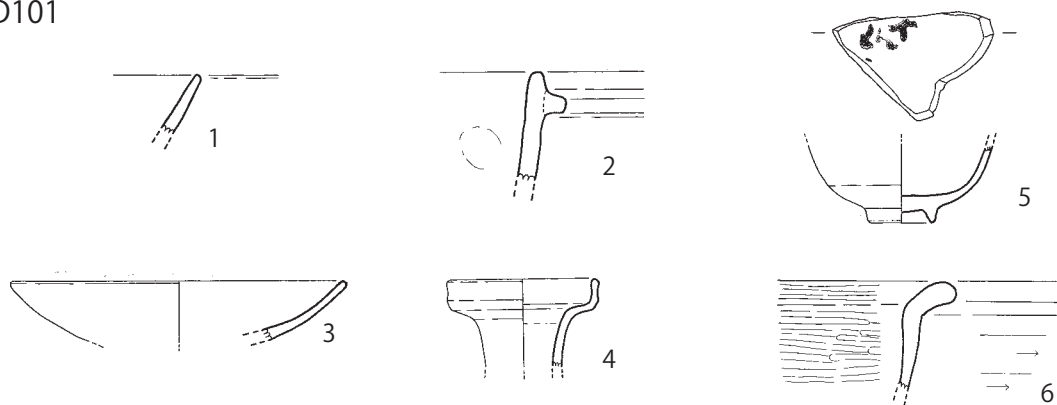
第13図 区域4平面図（1/100）



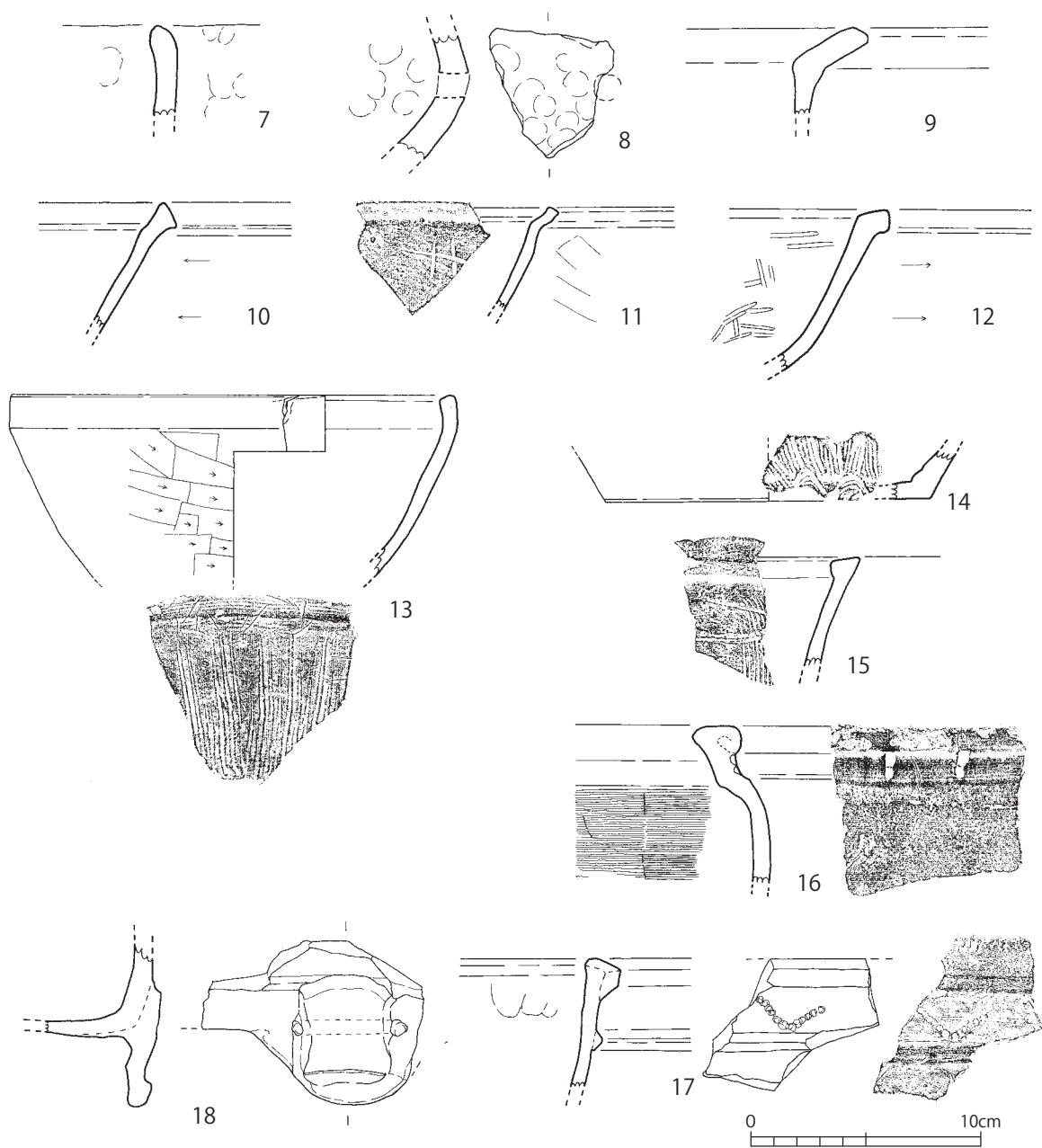
第14図 区域4土層断面図（1/60）



SD101

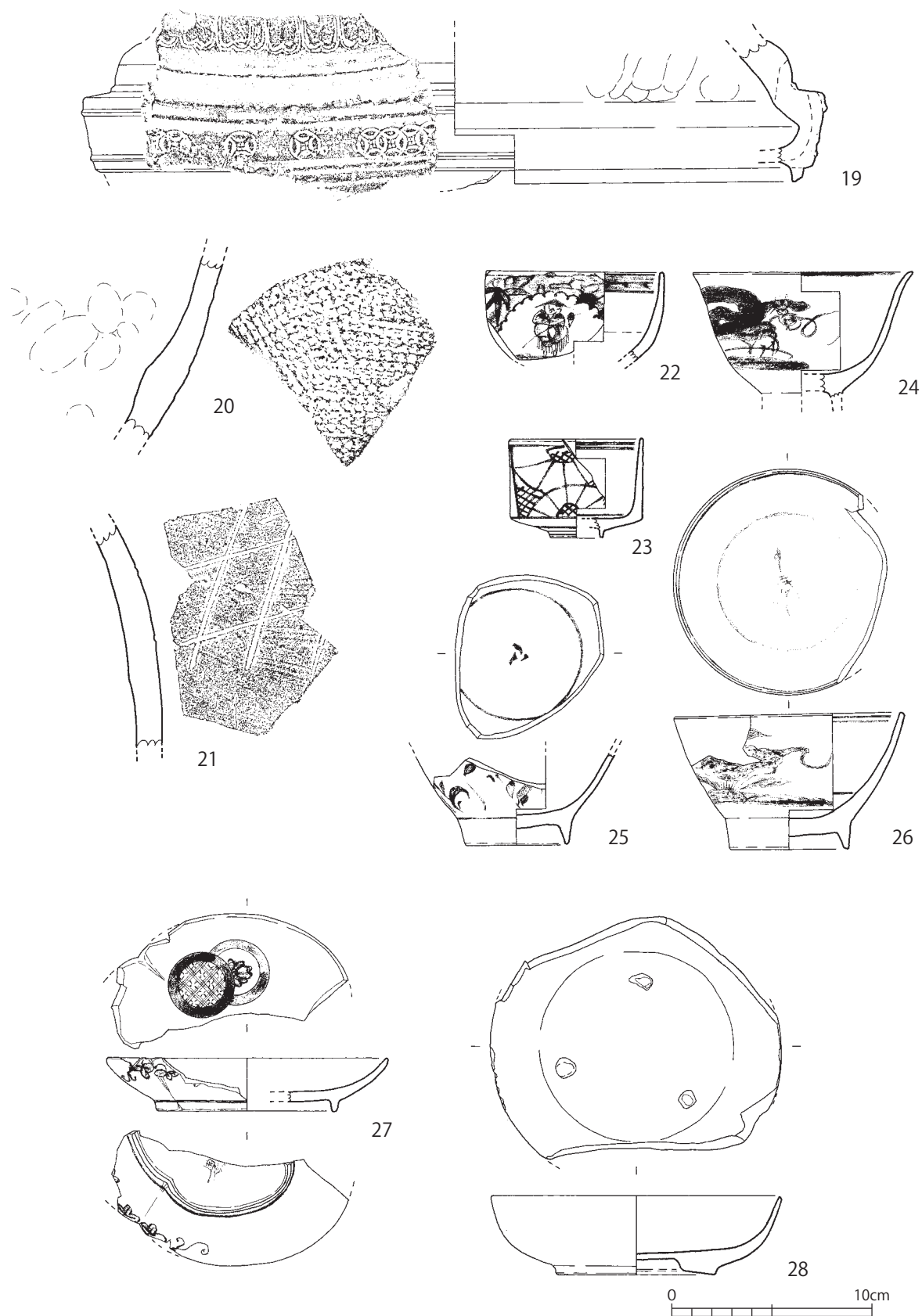


SE301①



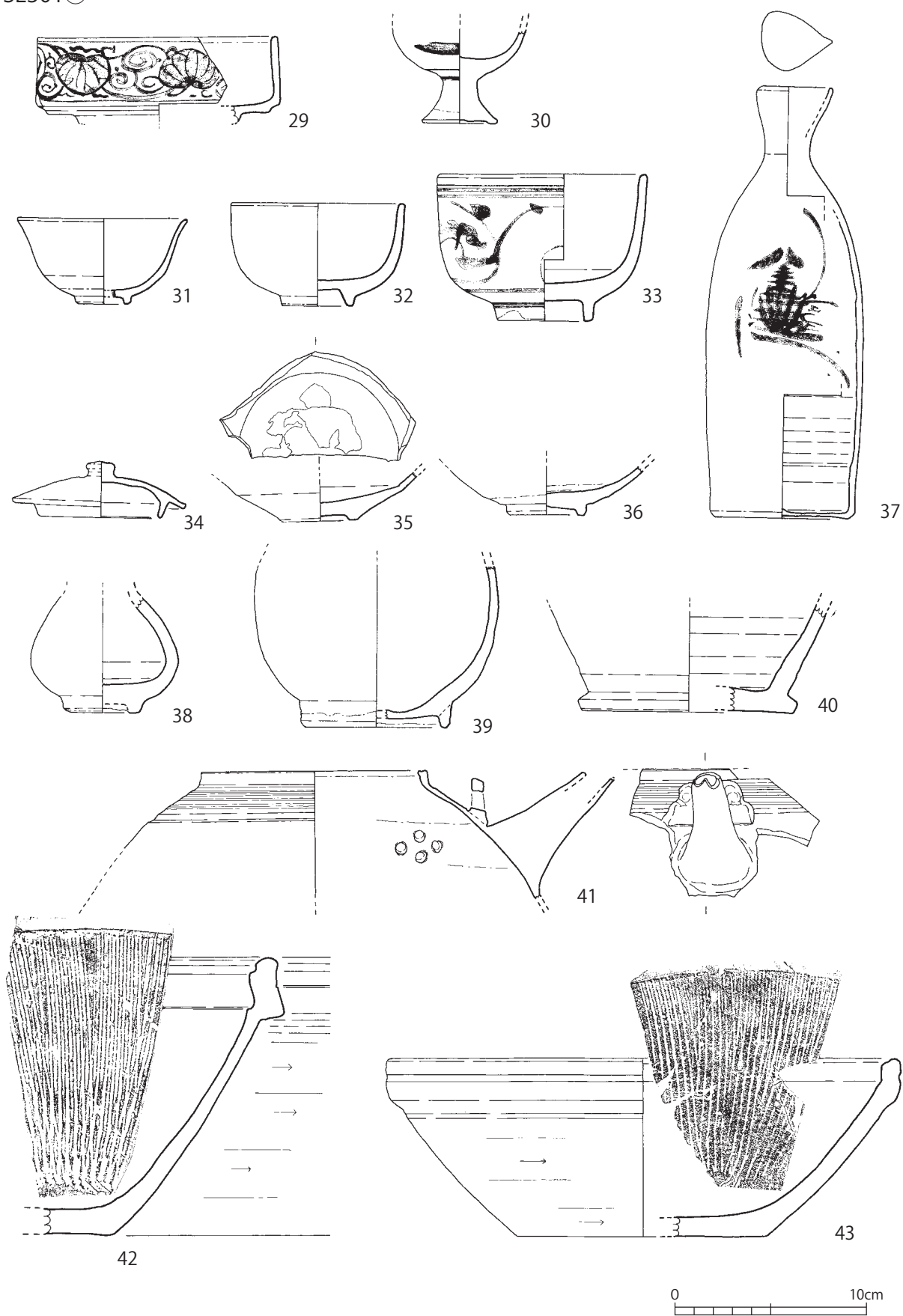
第15図 出土遺物実測図① (1/3)

SE301②



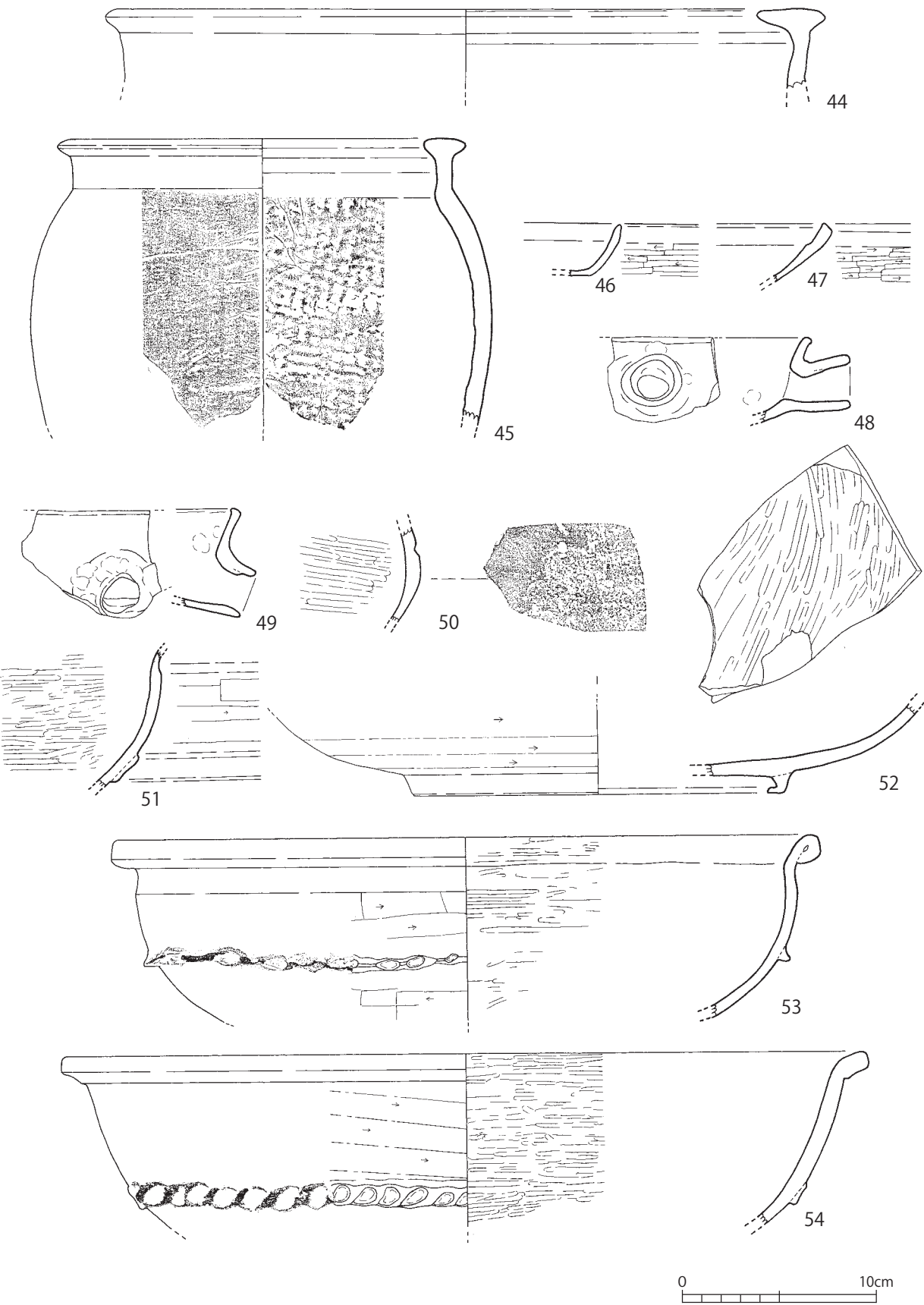
第16図 出土遺物実測図② (1/3)

## SE301③



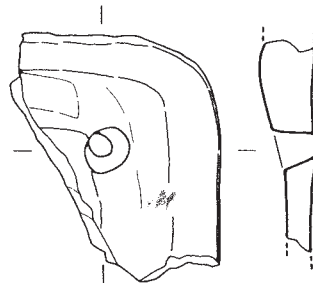
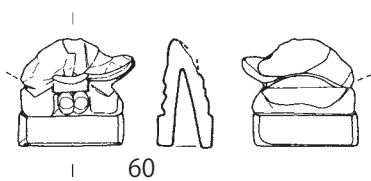
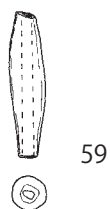
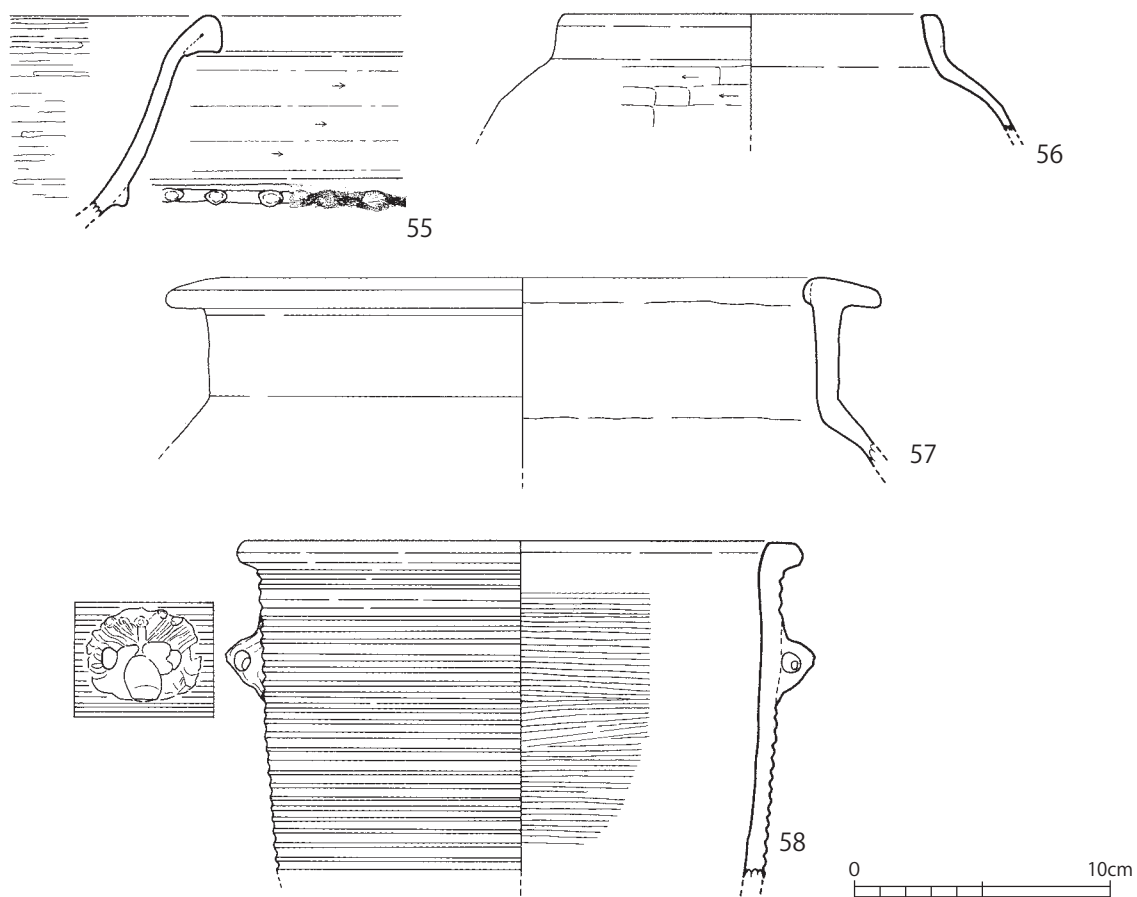
第17図 出土遺物実測図③ (1/3)

SE301④

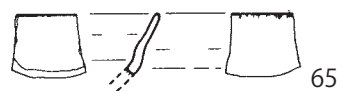
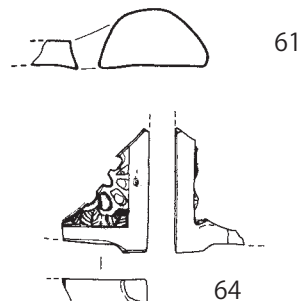
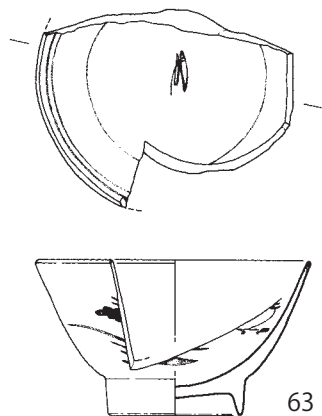
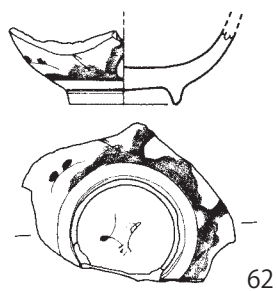


第18図 出土遺物実測図④ (1/3)

SE301⑤

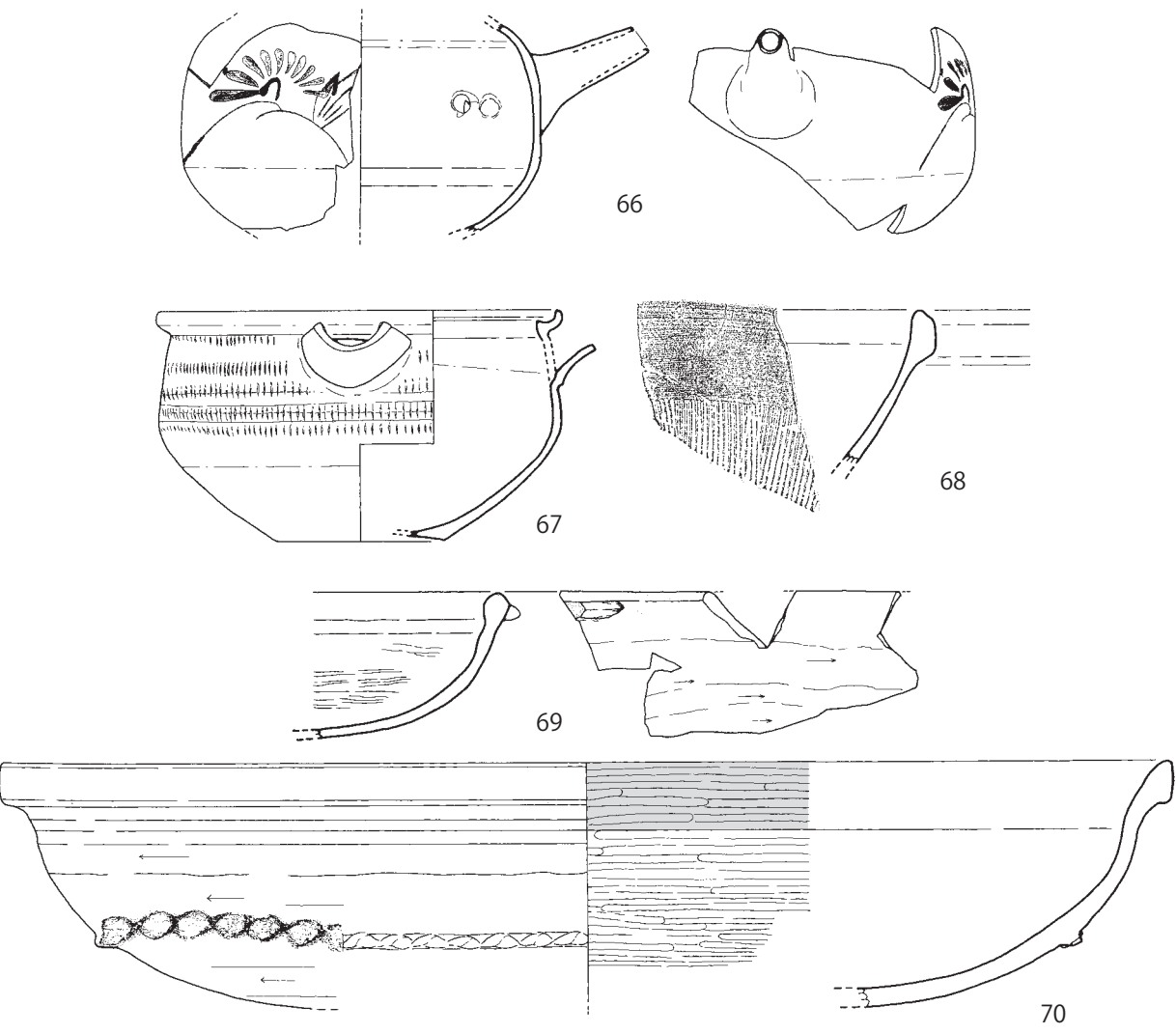


SK322

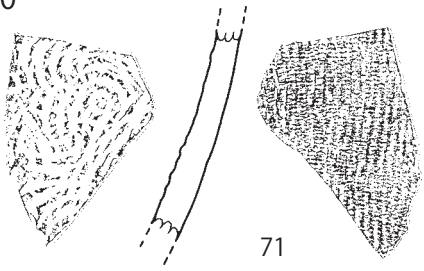


第19図 出土遺物実測図⑤ (1/3)

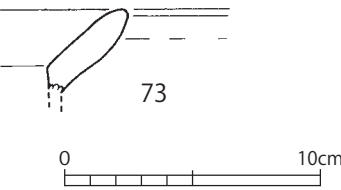
SK322+SK323



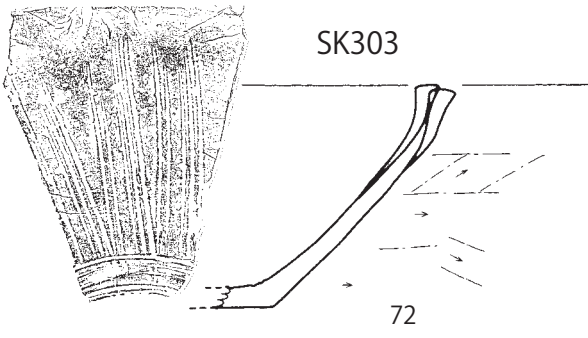
SK310



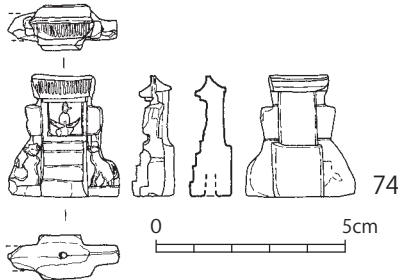
SP320



SK303



表土



第20図 出土遺物実測図⑥ (1/3・74は1/2)



### 第3章 調査の方法と成果

出土遺物観察表①

插图番号	地区・遺構番号	種別	器種	生産地	口径	器高	底径	外面文様・調整	内面文様・調整	備考
15図1	区域1・SD101	瓦器	椀	在地	—	2.3+ $\alpha$	—	ヨコナデ	ヨコナデ	
15図2	区域1・SD101	土師質土器	釜	在地	—	4.3+ $\alpha$	—	ヨコナデ、ナデ	ナデ、ユビオサエ	
15図3	区域1・SD101	磁器	青磁皿	肥前	(13.2)	2.4+ $\alpha$	—	施釉	施釉、蛇ノ目釉剥ぎ	反転復元 時期：17世紀後半代
15図4	区域1・SD101	磁器	瓶	肥前	(6.0)	3.5+ $\alpha$	—	施釉	施釉、露胎	反転復元 時期：18～19世紀代
15図5	区域1・SD101	磁器	小坏	肥前	—	3.1+ $\alpha$	(2.5)	施釉、露胎	施釉、見込(草花?)	反転復元 時期：18世紀前半代
15図6	区域1・SD101	土師質土器	捏鉢	高村	—	4.3+ $\alpha$	—	ヘラケズリ	ヘラミガキ	
15図7	区域3・SE301	土師器	蛸壺	在地	—	4.0+ $\alpha$	—	ユビオサエ	ユビオサエ	
15図8	区域3・SE301	土師器	蛸壺	在地	—	5.4+ $\alpha$	—	ユビオサエ	ユビオサエ	胴部に穿孔あり
15図9	区域3・SE301	土師質土器	鍋	在地	—	3.8+ $\alpha$	—	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	
15図10	区域3・SE301	瓦質土器	鍋	在地	—	5.7+ $\alpha$	—	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	
15図11	区域3・SE301	瓦質土器	鍋	在地	—	4.5+ $\alpha$	—	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	外面：煤付着 内面：ヘラによる線刻あり
15図12	区域3・SE301	瓦質土器	鉢	在地	—	7.1+ $\alpha$	—	ヘラケズリ後ヨコナデ	ヘラミガキ	
15図13	区域3・SE301	瓦質土器	播鉢	在地	(19.0)	8.0+ $\alpha$	—	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、播り目	反転復元
15図14	区域3・SE301	瓦質土器	播鉢	在地	—	2.1+ $\alpha$	(14.0)	ヘラケズリ後ナデ	播り目	反転復元、見込に渦巻状ヘラ描き
15図15	区域3・SE301	瓦質土器	播鉢	防長系	—	4.8+ $\alpha$	—	ヨコナデ	ヨコナデ、播り目	
15図16	区域3・SE301	瓦質土器	甕形火鉢	防長系	—	6.1+ $\alpha$	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	口縁部外面にタテ方向の沈線
15図17	区域3・SE301	瓦質土器	火鉢	在地	—	5.6+ $\alpha$	—	ヨコナデ	ナデ、ユビオサエ	口縁部外面に列点文スタン
15図18	区域3・SE301	瓦質土器	火鉢	在地	—	7.2+ $\alpha$	—	ナデ	ナデ、ユビオサエ	脚部外面にヨコ方向の穿孔
16図19	区域3・SE301	瓦質土器	風炉	在地?	—	7.2+ $\alpha$	(25.7)	スタンプ文、ヨコナデ	ナデ、ユビオサエ	反転復元 外面に蓮弁文・七宝文のスタンプ
16図20	区域3・SE301	須恵質土器	甕	亀山?	—	9.4+ $\alpha$	—	格子目叩き	ナデ、ユビオサエ	
16図21	区域3・SE301	陶器	甕	備前	—	11.3+ $\alpha$	—	ナデ	ナデ	外面にヘラ描き
16図22	区域3・SE301	磁器	染付碗(丸碗)	肥前	(8.8)	4.1+ $\alpha$	—	文様(人物・風景)、施釉	文様(圏線)、施釉	反転復元 時期：1780～1800年代
16図23	区域3・SE301	磁器	染付碗(筒形碗)	肥前	(6.6)	5.0	(2.6)	文様(菊花・格子)、施釉	文様(圏線)、施釉、露胎	反転復元 時期：19世紀代
16図24	区域3・SE301	磁器	染付碗(端反碗)	肥前系	(10.8)	6.3+ $\alpha$	—	文様(草花)、施釉	文様(圏線)、施釉	反転復元 時期：1810～1860年代
16図25	区域3・SE301	磁器	染付碗(広東碗)	肥前系	—	4.5+ $\alpha$	5.0	文様(草花)、施釉、露胎	文様(圏線)、施釉	見込：文様か
16図26	区域3・SE301	磁器	染付碗(広東碗)	肥前系	11.2	6.8	5.8	文様(草花)、施釉、露胎	文様(圏線)、施釉	底部焼 時期：19世紀～幕末 見込：壽の崩し字
16図27	区域3・SE301	磁器	染付輪花皿	肥前	(14.0)	2.7	(8.8)	文様(草花)、施釉、露胎	文様(草花、四方禪)、施釉	反転復元 時期：1660～1680年代 糸切細工成形
16図28	区域3・SE301	磁器	青磁皿	肥前系	14.4	4.0	7.8	施釉	施釉	時期：18世紀後半～19世紀 蛇ノ目高台 見込三足ハマ痕
17図29	区域3・SE301	磁器	染付段重	肥前	(12.6)	4.5+ $\alpha$	—	文様(草花・弦)、施釉、露胎	施釉	反転復元 時期：18世紀後半～19世紀
17図30	区域3・SE301	磁器	染付仏飯器	肥前	—	5.0+ $\alpha$	(3.8)	文様(風景)、施釉、露胎	施釉	反転復元 時期：19世紀代
17図31	区域3・SE301	陶器	小碗	信楽	(8.8)	4.5	2.8	施釉、露胎	施釉	反転復元 時期：19世紀前半～中頃
17図32	区域3・SE301	陶器	碗	不明	9.0	5.4	3.8	施釉、貫入、露胎	施釉	時期：18世紀～19世紀
17図33	区域3・SE301	陶器	碗	不明	10.7	7.7	4.9	文様(唐草)、施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	陶胎染付 時期：18世紀後半～19世紀前半
17図34	区域3・SE301	陶器	蓋	不明	6.2	3.0	1.5	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ	時期：18世紀～19世紀
17図35	区域3・SE301	陶器	皿	唐津	—	2.4+ $\alpha$	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ、施釉	反転復元 時期：1600～1630年代 見込に重ね焼あり
17図36	区域3・SE301	陶器	皿	肥前	—	2.6+ $\alpha$	3.8	施釉、露胎	施釉、蛇ノ目釉剥ぎ	時期：17世紀末～18世紀 前半 銅緑釉皿
17図37	区域3・SE301	陶器	爛徳利	不明	3.7	22.7	7.6	文様(草花?)、施釉、貫入、露胎	施釉、露胎	

出土遺物観察表②

挿図番号	地区・遺構番号	種別	器種	生産地	口径	器高	底径	外面文様・調整	内面文様・調整	備考
17図38	区域3・SE301	陶器	瓶	不明	—	6.1+ $\alpha$	3.0	施釉、露胎	施釉	
17図39	区域3・SE301	陶器	瓶	不明	—	8.6+ $\alpha$	(7.4)	施釉	施釉、露胎、ロクロナデ	反転復元
17図40	区域3・SE301	陶器	鉢?	不明	—	5.8+ $\alpha$	(11.0)	ロクロナデ、ヘラケズリ後ナデ	ロクロナデ	反転復元
17図41	区域3・SE301	陶器	土瓶	関西系	(11.8)	6.7+ $\alpha$	—	施釉、露胎	施釉、露胎	時期：18世紀後半～19世紀
17図42	区域3・SE301	陶器	播鉢	堺	—	14.7	—	ヘラケズリ	播り目	時期：18世紀末～19世紀
17図43	区域3・SE301	陶器	播鉢	堺	(26.8)	9.5	(13.0)	ヘラケズリ	播り目	反転復元：19世紀代
18図44	区域3・SE301	陶器	甕	唐津系	(37.0)	4.1+ $\alpha$	—	ヨコナデ	ヨコナデ	反転復元 時期：18世紀後半～19世紀
18図45	区域3・SE301	陶器	甕	肥前	(19.4)	14.9+ $\alpha$	—	格子目叩き後ナデ	格子目叩き	反転復元 時期：18世紀後半～19世紀
18図46	区域3・SE301	土師質土器	皿	在地?	—	2.7+ $\alpha$	—	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	
18図47	区域3・SE301	土師質土器	焙烙	在地	—	3.0+ $\alpha$	—	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ナデ	外面に煤付着
18図48	区域3・SE301	土師質土器	焙烙	在地	—	4.4+ $\alpha$	—	ナデ	ナデ、ユビオサエ	把手が付く
18図49	区域3・SE301	土師質土器	焙烙	在地	—	5.6+ $\alpha$	—	ナデ	ナデ、ユビオサエ	把手が付く
18図50	区域3・SE301	土師質土器	焙烙	在地	—	5.0+ $\alpha$	—	ナデ	ヘラミガキ	外面に種子圧痕が残る
18図51	区域3・SE301	土師質土器	捏鉢	高村	—	7.1+ $\alpha$	—	ヘラケズリ、突帯貼り付け	ヘラミガキ	
18図52	区域3・SE301	土師質土器	捏鉢	高村	—	4.6+ $\alpha$	(19.0)	ヘラケズリ	ヘラミガキ	反転復元
18図53	区域3・SE301	土師質土器	捏鉢	高村	(36.0)	9.5+ $\alpha$	—	ヘラケズリ、突帯貼り付け	ヘラミガキ	反転復元
18図54	区域3・SE301	土師質土器	捏鉢	高村	(41.0)	9.0+ $\alpha$	—	ヘラケズリ、突帯貼り付け	ヘラミガキ	反転復元
19図55	区域3・SE301	土師質土器	捏鉢	高村	—	8.0+ $\alpha$	—	ヘラケズリ、突帯貼り付け	ヘラミガキ	
19図56	区域3・SE301	土師質土器	壺	高村	(14.6)	4.6+ $\alpha$	—	ヘラケズリ	ヨコナデ、ナデ	反転復元
19図57	区域3・SE301	土師質土器	甕	高村	(28.0)	7.5+ $\alpha$	—	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	反転復元
19図58	区域3・SE301	瓦質土器	火鉢	在地?	(21.6)	13.2+ $\alpha$	—	ヘラ状工具による多条沈線	ヨコナデ、ハケメ	反転復元
19図59	区域3・SE301	土師質土器	土錘	在地	長さ6.3	幅1.9	厚さ0.5	ナデ	—	完形品 穿孔あり
19図60	区域3・SE301	土製品	人形(天神様)	不明	長さ4.2+ $\alpha$	幅4.5	厚さ2.1	型作り	—	底部に穿孔あり
19図61	区域3・SE301	土製品	不明	不明	長さ9.8+ $\alpha$	幅8.3+ $\alpha$	厚さ2.2	ナデ	—	穿孔あり
19図62	区域3・SK322	磁器	染付碗(くらわんか碗)	肥前	—	3.0+ $\alpha$	4.3	文様(梅樹雪輪文)、施釉、露胎	施釉	時期：18世紀後半 高台裏に大明年製崩銘
19図63	区域3・SK322	磁器	染付碗(広東碗)	肥前系	(10.6)	6.2	5.1	文様(草花?)、施釉、露胎	文様(三重圏線)、施釉	反転復元 見込：鷺の崩し字か 時期：19世紀～幕末
19図64	区域3・SK322	磁器	染付筆筒?	肥前	長さ3.4+ $\alpha$	幅4.9+ $\alpha$	—	文様(菊花透かし、葉)、施釉	施釉	時期：18世紀後半
19図65	区域3・SK322	陶器	碗	萩	—	2.5+ $\alpha$	—	施釉	施釉	時期：19世紀代
20図66	区域3・SK322+323	陶器	土瓶	関西系	胴部最大径14.6	8.5+ $\alpha$	—	イッチン掛け・鉄絵の草花文様	施釉	反転復元
20図67	区域3・SK322+323	陶器	行平	関西系	(16.2)	9.5	(6.8)	飛び鉋、施釉、露胎	施釉	反転復元 時期：19世紀代
20図68	区域3・SK322+323	陶器	播鉢	唐津系	—	6.3+ $\alpha$	—	ヨコナデ	播り目	
20図69	区域3・SK322+323	土師質土器	焙烙	高村	—	6.0+ $\alpha$	—	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ	外面に煤付着
20図70	区域3・SK322+323	土師質土器	捏鉢	高村	(47.2)	10.0+ $\alpha$	—	ヘラケズリ、突帯貼り付け	ヘラミガキ	反転復元 口縁部内面に丹塗り
20図71	区域3・SP310	須恵器	甕	在地	—	8.3+ $\alpha$	—	格子目叩き	同心円文叩き	
20図72	区域3・SK303	瓦質土器	播鉢	在地	—	8.7	—	ヘラケズリ	播り目	片口口縁
20図73	区域3・SP320	土師質土器	鍋	在地	—	4.1+ $\alpha$	—	ヨコナデ	ヨコナデ	
20図74	区域3・表土	土製品	人形(稲荷社)	不明	長さ3.2	幅2.9	厚さ1.2	型作り	—	完形品 底部穿孔あり



## 第4章 まとめ

### 第1節 遺構と出土した陶磁器・土器について

今回の調査は、区域1～区域4に分け、総面積147㎡の小規模な調査面積であったが、江戸時代後期を中心とする遺構を確認した。ここでは調査で分かったことについて触れる。

遺構は、区域1～区域4の全域にて確認することができたが、近・現代の土地改変に伴うカクランが少なからず見受けられた。区域2・区域4は、各区域ともピット・土坑を検出したが、遺構内からの土器・陶磁器等の出土等が皆無のため、遺構の性格や明確な時期を把握することはできない。

そのような状況のなか、区域1では溝を、区域3ではピット・土坑・井戸等の遺構を検出し、これに伴い近世後期を中心とする土器・陶磁器等が出土した。今回の調査で検出した一ツ松城跡の時期について、多種多様な遺物が出土した区域3の井戸（SE301）、土坑（SK322・323）を中心に考えたい。

SE301では、近世後期を中心とする遺物出土が見受けられるなか、流れ込みの性格をもつものの、中世後期を中心とする遺物が出土している。特徴的な遺物を概観すると、瓦質土器の鍋（第15図10・11）、播鉢（第15図13・14）、防長系の瓦質土器播鉢（第15図15）・甕形火鉢（第15図16）、深鉢形火鉢（第15図17）、風炉（第16図19）、備前焼甕（第16図21）などが見受けられる。瓦質土器の雑器が多い。在地の瓦質土器は、県北地域にて出土事例が多く、小柳和宏氏が器種整理、編年をまとめられている（小柳1995）。小柳氏の論考以降、当該地域の出土事例は増えているものの、良好な一括資料は少ない状況である。列点文スタンプが付く火鉢（第15図17）は、第3章で触れたが、宇佐市・木内遺跡1次や下林遺跡Ⅱ区、中津市・諫山遺跡に出土事例があり、これらは17世紀代に位置付けられる。また本遺跡では後述するが、17世紀前半代の見込に砂目痕が付着する唐津焼皿（第17図35）が出土している。これを考慮するならば17世紀代に降る可能性がある。今後の資料増加をまちたい。その他の遺物について触れる。風炉については、中世大友府内町跡などの都市遺跡や城館・寺院などに出土傾向がある。城館や寺院の出土傾向については、水澤幸一氏が威信財としての役割を担っていたとしている（水澤1999）。本資料は至近に城館関連の遺構が展開していることを示唆する。ただし、風炉は一遺跡一形式の状況が看取されることから、共伴資料からの詳細な時期把握、深鉢形火鉢など他器種と併せた装飾スタンプ文の比較と把握が課題である。以上、本遺跡で出土した中世後期を中心とする出土遺物について触れた。これらの時期については、15世紀～17世紀前半頃として捉えておきたい。

つぎに近世出土遺物について触れる。SE301、SK322・323ともに多種多様な陶磁器、土器が出土した。ここでは時期別に整理し把握する。

- 17世紀前半：唐津焼陶器皿（第17図35）
- 17世紀後半：肥前磁器染付皿（第16図27）
- 17世紀後半～18世紀前半：肥前磁器染付丸碗（第16図22）、肥前陶器皿（第17図36）
- 18世紀代：高村焼捏鉢（第18図54）
- 18世紀後半：肥前系磁器染付くらかわんか碗（第19図62）、肥前磁器染付筆筒（力）（第19図64）
- 18世紀後半～19世紀：肥前系磁器青磁皿（第16図28）、肥前磁器染付段重（第17図29）、関西系陶器瓶（第17図41）、唐津系陶器甕（第18図44）、肥前系陶器甕（第18図45）
- 19世紀代：肥前磁器染付筒形碗（第16図23）、堺産陶器播鉢（第17図42・43）、関西系陶器土瓶（第20図66）、関西系陶器行平（第20図67）高村焼捏鉢（第18図53・55）
- 19世紀前半～中頃：肥前系磁器染付端反碗（第16図24）、肥前系磁器染付広東碗（第16図26・第19図63）、信楽焼陶器小碗（第17図31）

近世遺物については、肥前・肥前系磁器、唐津・肥前系陶器、関西系陶器、土師質土器の高村焼がみられる。时期的に17世紀～19世紀を通してみられるが、17・18世紀代の陶磁器・土器については遺構の性格から流れ込みに伴うものと考えられる。このことから本遺跡で検出した遺構の主体的な時期は19世紀前半～中頃を中心として位置付ける。

つぎに今回の調査・整理作業で新たな知見を得た、出土した19世紀代の磁器について触れる。本遺跡出土した染付端反碗、染付広東碗及び青磁皿について、肥前と異なる胎土、染付手法を異なることが指摘される（註1）。肥前の青磁皿は、有田では見込の目跡の間隔が狭く小さいのが特徴であり、また波佐見では足付ハマを使用せず、蛇ノ目釉剥ぎが主体である。本遺跡で出土した資料は足付ハマの目跡の間隔・幅とも大きいのが特徴であり異なるものである（写真図版五・28を参照）。また端反碗、広東碗とも本遺跡で出土した資料は内面に多重圏線文を描くのが特徴で

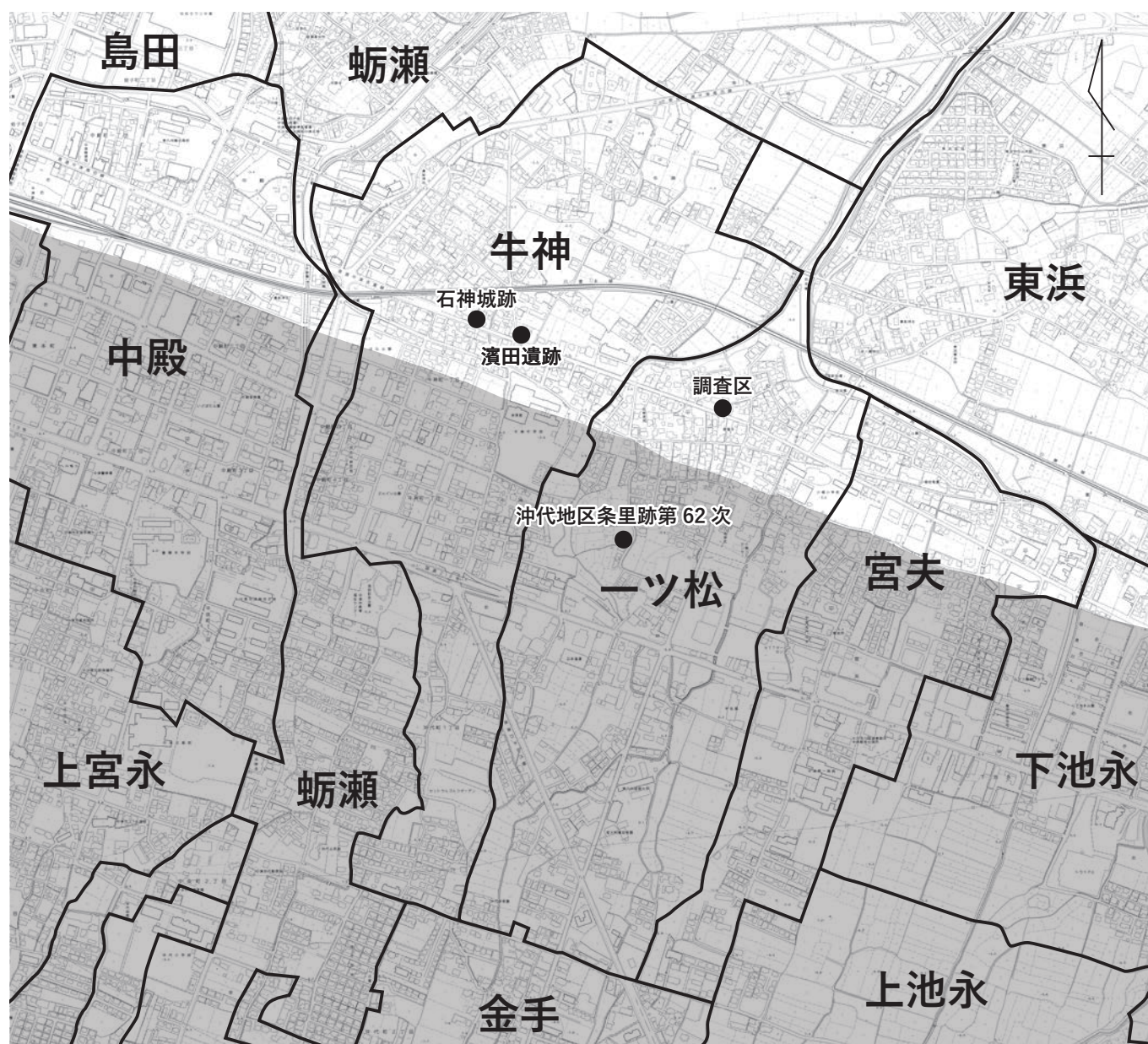


あり（写真図版六・63を参照）、近年、研究が進展している愛媛県砥部焼（石岡2016）等の地方窯の生産、流通によるものと考えられる。19世紀に入ると、肥前からの技術拡散で地方窯が開窯する時期にあたり生産、流通することから、本報告の資料については「肥前系」としている。今後は県内で出土する当該時期の染付端反碗、広東碗について、この点に留意し地方窯の生産地を含めたその様相を考えていくことが課題となろう。

## 第2節 一ツ松城跡の立地・景観、性格について

前節では、本調査で検出した遺構、遺物について触れた。本節ではこれをふまえて遺跡の性格について考えたい。

まず一ツ松城跡が立地する地形環境であるが、本書巻末の資料図版一を参照されたい（註2）。一ツ松城跡は平野部に立地し、西側に近接する石神城跡・濱田遺跡は砂州上に立地する。砂州は中津川右岸の旧海岸部を中心として東西に随所みられる。石神城跡・濱田遺跡及び一ツ松城跡の南には、沖代地区条里跡が広がる（第21図及び資料図版一）。石神城跡・濱田遺跡及び一ツ松城跡は、沖代地区条里跡の北限ラインに接する。沖代地区条里跡の大部分は扇状地から成り、旧河道が南北に幾つかにわたって延びており、旧河道に制約されて水田区画の乱れが確認できる。近年、中津市教育委員会によって、宅地造成に伴う発掘調査を、大字一ツ松内の字「一ツ松畑」にて実施している（中



—— は大字境

■ は現地形および地籍図（明治21年）にみえる条里区画 ※一部に推定ラインを含む

第21図 調査区周辺の大字名と沖代地区条里跡



## 第4章 まとめ

津市教育委員会2024、本書巻末の資料図版二を参照)。調査では旧河道を検出している。遺構は旧河道の制約を受けピット、土坑、溝を検出しているが、良好な出土資料は僅少であり、中世以降の開発と捉えている。総じて、沖代地区条里跡内の考古学的成果によると、古代以前には集落として利用されているが、古代以降の集落は限定的で、低位部を中心に水田、畑地が広がり、条里施工後の基本的な景観が現代へと引き継がれていったことが考えられる（大分県立歴史博物館2021）。

つぎに一ツ松城跡周辺の歴史的景観について考えたい。本書巻末の資料図版二は、大字一ツ松内の近代における土地利用図を復元したものである（註3）。一ツ松城跡の今回調査した箇所（黄色）は、小字「楠本」と「屋敷」にあたる。そのうち区域1・2は字「楠本」に、区域3・4は字「屋敷」にあたる。字「屋敷」の東側は字「東出口」、西側は字「西出口」が接している。字「屋敷」の土地利用は、ほぼ中央に道が東西に横断し、これを軸に北、南に宅地が密集する。宅地内は南北に枝道が細分され、集落を形成している。字「屋敷」より以南は、沖代地区条里跡の範囲内にあたり、大部分は水田が広がる。大字一ツ松の景観を概観すると、水田がほぼ全域に広がるなか、字「屋敷」にて集村形態のムラが立地する。一ツ松の場合、字「屋敷」に伴って「東出口」、「西出口」が呼称されているが、字「屋敷」周囲を見ると、必ずしも屋敷に伴う堀や土塁を示す地筆は確認されない。ただし字「屋敷」南に同じ字名で別の「屋敷」が接しており、土地利用は水田で条里的地割を呈する。同「屋敷」名が連続しているのは興味深い。近年、小柳和宏氏は、中津市内の中近世城館を総括するなかで、ムラと道の一体化を提示している（小柳2022）。集村形態を呈する字「屋敷」内を東西もしくは南北に道が横断する形態は、近接する石神城跡においても確認され（小柳2022、横澤2023）、この地域のムラの景観を具現している。字「屋敷」内には浄土真宗善蓮寺が所在し、開基が天正年間（1573～1592年）とされている。これはムラの中核として成り立ったと考えられる。また山国川右岸の大井手井堰は沖代条里水田を灌漑する基幹井堰である。隣接する八幡鶴市神社の花傘鉾祭りは大井手井堰と深く関係しており（資料図版一を参照）、中世伝承として大井手井堰の灌漑範囲に関わる在地領主七人の一人として一ツ松六郎重氏が登場する（飯沼2018）。いずれも当該地域のムラ及び水田等の開発の成り立ちを示唆する。

今回の発掘調査では、断片的であるが15～16世紀代を中心とする遺物を確認した。遺物内容から集村化したムラが中世後期に辿りうることを示し、現時点では城館の詳細な空間は明らかにしえないが、平地城館的なムラとして成り立ったと考えられる。続く近世段階もそのまま「一ツ松村」の集落として継承された。19世紀代を中心とする陶磁器・土器や貝類の出土は、集落の生活空間の場であったことを証左するものといえよう。最後になりましたが、関係者の方々のご理解、ご協力を得ました。謝意を表します。

註(1) 赤松和佳氏、山本文子氏、村上信之氏、中野雄二氏よりご教示を得た。

- (2) 資料図版一は、中津市歴史博物館のご厚意により、同館図録2024刊行の掲載図版データを提供して頂き、これをもとに一部、加筆している。図中表示の「地籍図にみえる沖代地区条里跡区画」は、大分県立歴史博物館2021『沖代条里の調査 本編』付図を参考にしている。
- (3) 資料図版二には、中津市歴史博物館のご厚意により、昭和9（1934）年大日本帝国市町村地図刊行会刊行の『中津市土地法典』掲載の「一ツ松」について情報提供して頂き、これをもとに地目は明治21（1888）年前後に調製された地籍図（字図）で確認し、作図した。

参考文献 飯沼賢司2018「条里地割と水利と祭祀に関する歴史的考察」『聖域・街道・地割Ⅱ』別府大学

石岡ひとみ2016「近世・近代における砥部焼磁器の製品と流通について」『中近世陶磁器の考古学』第2巻 吉川弘文館

大分県立埋蔵文化財センター 2023『石神城跡 濱田遺跡』

大分県立歴史博物館2020『沖代条里の調査 資料編』

大分県立歴史博物館2021『沖代条里の調査 本編』

小柳和宏1995「宇佐高村と中世雑器生産」『大分県地方史』第159号 大分県地方史研究会

小柳和宏2022「中津平野の平地城館とムラ」『中津市の中・近世城館の各説・総括編』

中津市教育委員会2022『中津市の中・近世城館の各説・総括編』中津市教育委員会

中津市教育委員会2024『沖代地区条里跡62次調査』

中津市歴史博物館2024『特別展 開発！ Kaihotsu！—中津の古代から中世—』

水澤幸一1999「瓦器、その城館的なもの」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所

横澤 慈2023「総括」『石神城跡 濱田遺跡』大分県立埋蔵文化財センター

---

# 写真・資料図版

---

写真図版 一～六

資料図版 一・二

遺物番号は、出土遺物実測図の番号と共通





遺跡空撮全景（北西から）



遺跡空撮全景（北東から）





区域1 空撮全景（北から）



区域3 空撮全景（北から）





区域1 検出（西から）



区域1 東西土層断面（北から）



区域1 SD101土層断面（北から）



区域1 SD101完掘（西から）



区域2-1 完掘（東から）



区域2-1 SP201・202完掘（北から）



区域2-1 南北土層断面（東から）



区域2-2 完掘（北から）





区域3 検出（西から）



区域3 SE301検出（西から）



区域3 SE301土層断面（北から）



区域3 SE301完掘（西から）



区域3 SK323検出（北から）



区域3 SK323完掘（西から）



区域3 完掘（西から）



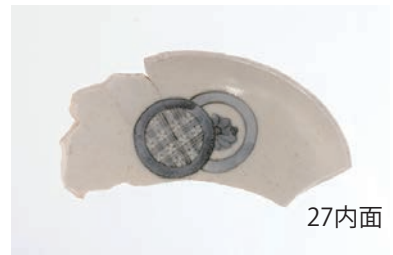
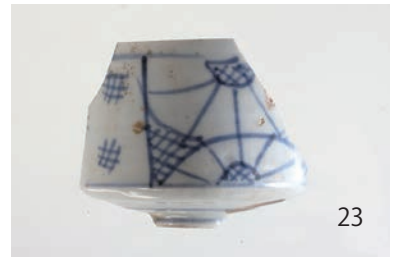
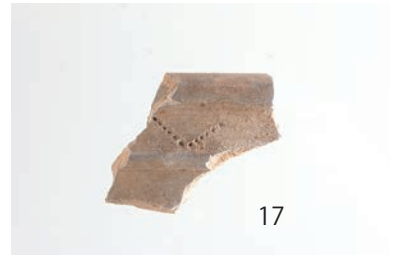
区域4 完掘（東から）



区域1 SD101



区域3 SE301①



区域3 SK3201②



33



37



41



43



54



57

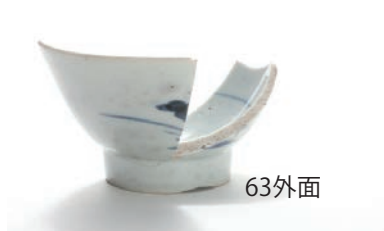


58

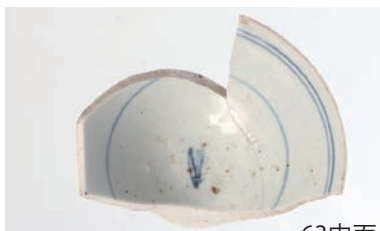


60

区域3 SK322



63外面



63内面



66

区域3 SK322+SK323

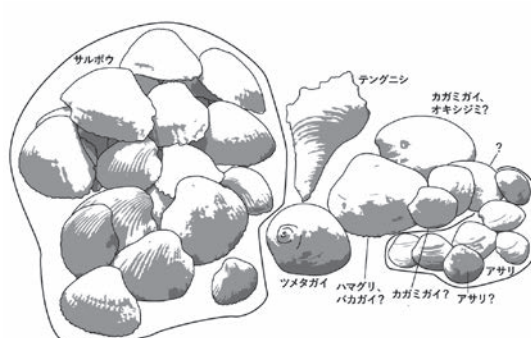


67

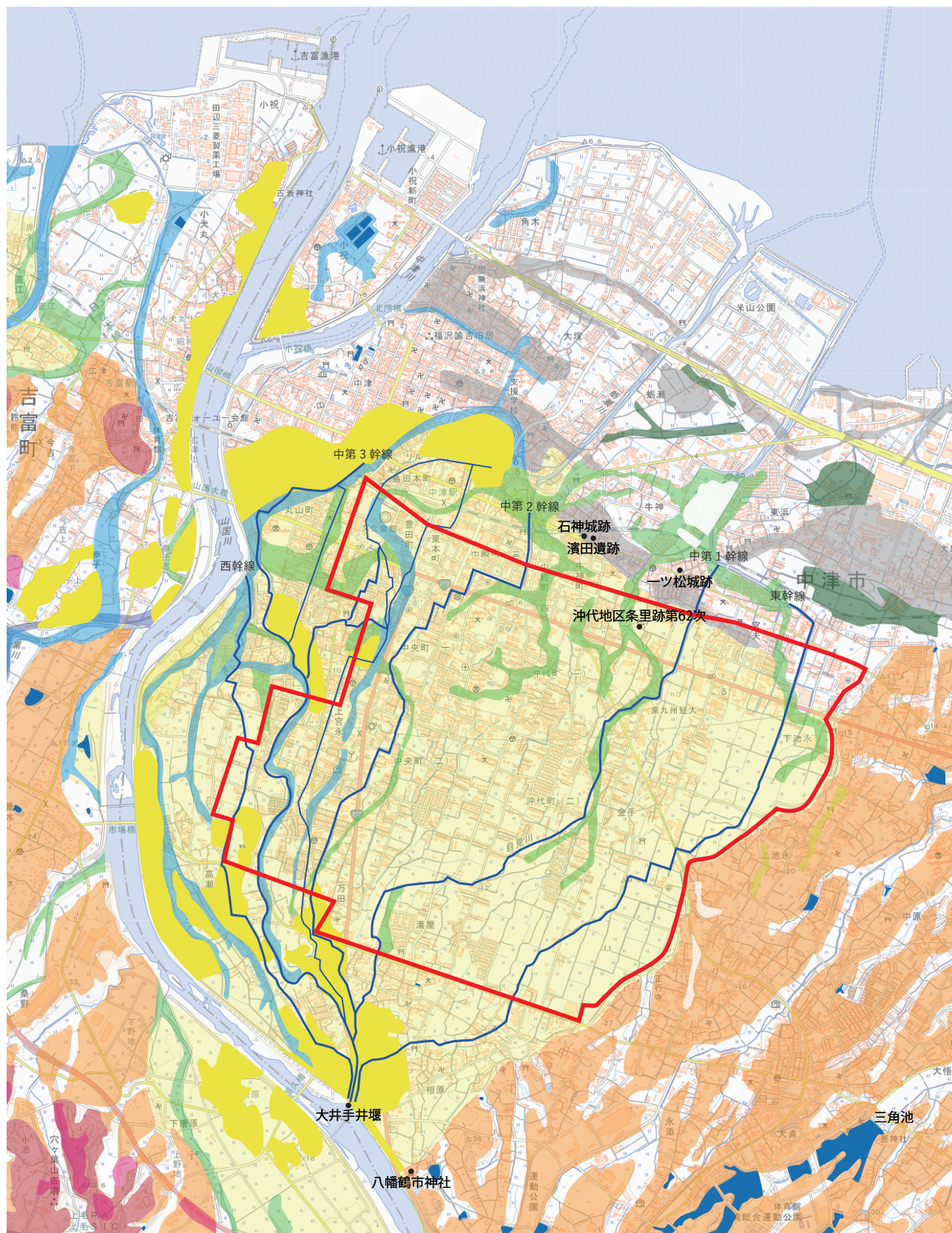


74

区域3 SK323 貝類集合写真







## 凡 例

- |      |          |  |
|------|----------|--|
| 山地   | 後背湿地     | 浅い谷  |
| 台地   | 切土地      | 現地形および地籍図(明治21年)にみえる沖代地区条里跡区画 ※一部に推定ラインを含む |
| 扇状地  | 水路       |  |
| 自然堤防 | 河道跡(明瞭)  |  |
| 砂州   | 河道跡(不明瞭) |  |
| 平野   | 池        |  |

出典：国土地理院標準地図  
 国土地理院治水地形分類図  
 (標準図に治水地形分類図を加工して配置)

(中津市歴史博物館  
 『特別展 開港！ Kaihotsu！ - 中津の古代から中世 -』  
 図録(2024年刊行)掲載図版の提供を受け、一部加筆。)

一ツ松城跡周辺地形と沖代地区条里跡の現況水利





## 報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひとつまつじょうあと
書 名	一ツ松城跡
副 書 名	都市計画道路外馬場錆矢堂線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	(2)
シ リ ー ズ 名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第33集
編 著 者 名	山本哲也
編 集 機 関	大分県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒870-0152 大分市牧緑町1-61
発行年月日	2025（令和7）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひとつまつじょうあと 一ツ松城跡	なかつし おおあぎ 中津市大字 ひとつまつ 一ツ松	442038	203010	33° 35′ 43″	131° 12′ 20″	令和5年6月 12日 ～ 7月11日	147m <sup>2</sup>	都市計画道路 外馬場鍔 矢堂線街路 改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代			主な遺物		特記事項	
一ツ松城跡	城館	中世～近世			土師質土器・瓦質土器・ 陶磁器・瓦・貝類			
要 約	<p>一ツ松城跡の発掘調査は、都市計画道路外馬場鍔矢堂線街路改良事業に伴い実施した。一ツ松城跡は一ツ松氏の城館として伝わるが、地表面で確認できる遺構は認められない。発掘調査では19世紀代を中心とする柱穴、土坑、溝、井戸を検出し、陶磁器・土器が出土した。中世城館に関連する遺構は検出できなかったが、中世後期を中心とする土器が出土している。とくに遺構を検出した箇所は字屋敷にあたり、中世段階に、集村化したムラが平地城館的なムラに進展し、近世以降は「一ツ松集落」へと継承したと考えられる。</p>							

---

## 一ツ松城跡

—都市計画道路外馬場錆矢堂線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—

大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第33集

令和7（2025）年3月31日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター  
〒870-0152 大分市牧緑町1-61  
TEL 097（552）0077

印刷 株式会社エデンメディアワークス  
〒872-0001 大分市南津留8-1  
TEL 097（558）5684

---